338
111

始

338
111

二十世紀：喜劇四幕：

バアナアド・ショウ作。
松居駿河町人譯。

You Never Can Tell

春陽堂：東京
大正元年

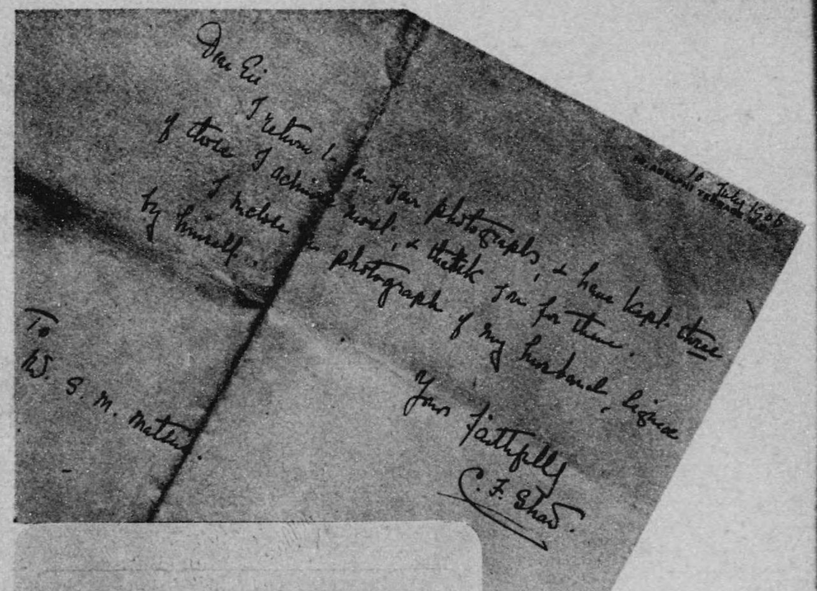
338-11

文藝協會第四
回公演用脚本

二十世紀

(You Never Can Tell)

大正
1.11.30.
內交



Dear Sir

I return herewith your photographs, & have kept those of those of actresses only, & thank you for them.

I enclose a photograph of my husband, signed by himself.

Yours faithfully

C. F. Shaw.

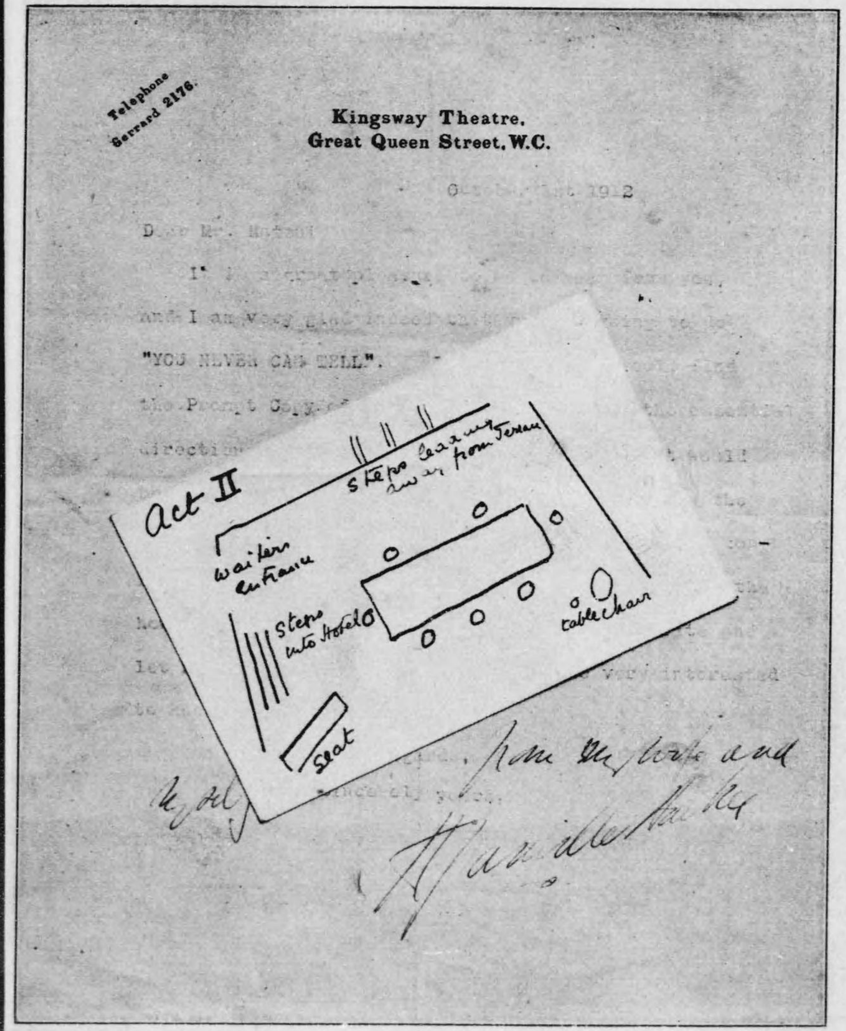
To
W. S. M. Meter.

此脚本の作者バアナアド・ショウ氏の寫眞と其手署、ならびにショウ夫人より此脚本の飜譯者に贈れし自筆の書簡

序

美文の翻譯は、其趣味性や其才能や其筆致が、原作者と似てゐる人の筆に成つたのが一番趣が深い。さうでないと、如何程忠實に巧妙に譯されてゐても、原作の面影としては物足らなく感ずる

とはいへ、此注文通りの翻譯は、古今内外とも、容易には得られない。特に、原作者が複雜な性格の、多方面の才能の、飛び離れた天才である上に、作が實演さるべき脚本なぞであ



明治三十八年及び三十九年の兩年、倫敦コートー座に於て此脚本を演出し、世界の好評を博したる、英國の脚本家にして名優の一人なる、グラヴィンルーバ・アカアア氏より、今回の公演につき翻譯者に贈られたる其書翰を、各舞臺面の略圖の一

ると、いよ〳〵以て適任者が得がたいのである。

現代の世界的文豪中で、此「二十世紀」の作者ほど、飛離れて多方面な人が又とあらうか。フェビヤン會員の社會主義者で破壞的兼建設的の社會改良家、イブセンの讃美者であつて帝國主義者、ワグネルの推奬者であつて禁酒家、菜食主義者、非解剖論者、それほどピューリタン的でありながら非宗教家、市會議員で群衆辯士で論策家で音樂演劇の專門批評家、最初は小說家で後には成功せる脚本家、歷史物も書けば喜劇も書けば喜劇とも悲劇ともつかぬものも書けばファースも書く、希有の精力家で健筆家で饒舌家で頓智家で、磊落なやうな神經家で、皮肉を極めた滑稽家で大まじめな道化役者、自家推尊の巨擘、つむぢ曲りの親玉、さかねぢの大家、擧足取の名人と、かう數へ立てゝ見ると、殘念ながら我文壇の名家で、迚も一人で此大家と相撲を取り得る人はあるまいと思ふ。假にも彼れを拔くには、我文壇の俊豪少くとも五人以上の協力を要するであらう。只其脚本だけでも、そもそも誰れを賴んで當つて貰つたものであらうか。

思ふに、此「二十世紀」の譯者としては、著名な新聞記者でも

あつて著名な雜誌記者でもあつた敏腕の實務家、現に非常の精力家でもあつて健筆家でもあり、嘗て小說家でもあつて翻譯家でもあつた演劇の改良家、內外劇に精通した諸種の脚本作家であつてオペラの作詞家でもあれば翻案劇の老手でもあり、特に喜劇に成功したる作者、經驗に富んだ舞臺監督でもあり、外國の風俗通でもあり、ショーの知人でもあり、皮肉な滑稽家でもあり、謙遜なやうな倨傲なやうな、婉曲なやうな露骨なやうな嘲罵諷刺の達人でもある駿河町人子、松居松葉君ほど、其任に適した人はあるまい。全くあるまい。

「二十世紀」は、其原作に忠實な點に於て、其最も實演に適する點に於て、其翻譯の悉く垢ぬけがして幾ど創作かと思はれるほど自然な點に於て、得易からぬ翻譯脚本の上乘と信ずる。

大正元年十月

道遙

倫敦ローヤルテー座
明治三十二年十一月
二十六日開場

ファガス.クランプトン……ヘルマン.ヴェザン

ブーン(王室辯護士)……チャアレス.チャアリントン

ノインチ.マッコーマス……シドネー.ヴァデン

給仕人……ジエームス.ウェルシュ

ヴァレンタイン……ヨーク.スチーヴンス

フィリップ.クランドン……ローラント.ポットムレー

女中……マベル.ハアデンヂ

クランドン夫人……エルシイ.チェスタア

ドーリー.クランドン……ウィニフレッド.フレーザア

グローリヤ.クランドン……マアガレット.ハルスタン

倫敦コート座
明治三十九年七月
九日開場

東京有樂座
大正元年十一
月十六日開場

エドマンド.ガアネー……東儀鐵笛

ジェームス.バーン……加藤綱一

アトール.フォード……西原勝彦

ルキ.カルヴアト……森英治郎

ヘンリー.エーンレー……土肥春曙

ノルマン.ベージ……横川唯治

ヘーゼル.トムソン……宮部靜子

ヘンリエッタ.ロッソン……松井須磨子

ドロスエー.ミント……和泉房江子

リヽアー.マッカアシー……都鄕道子

二十世紀 (You Never Can Tell)

英國 バアナアド・ショウ 作

日本 松居松葉 譯

第一幕

千八百九十六年の晴れた八日の朝、齒科醫の治療室での事。普通の小さい倫敦の居間では無い。盛んな海水浴場の海に面した高臺の或る雜作付貸家の一番好い居間で、脇に瓦斯ポンプとシリンダアのついてる治療臺が、室の中央と其一隅との、丁度中間に置てある。諸君若しその臺に面せる窓を透して部屋を覗かば、諸君は諸君と反對の壁の眞中に煖爐があつて、諸君の左側には、戸のある事を見られるであらう。王立地理學協會會員の免狀は

額縁に入つて、煖爐棚の上にかけてある。黒い革をかぶせた安樂椅子は煖爐の前に在つて、滿洒したストールとベンチとは、萬力や、種々な道具や、乳鉢や、乳棒と一緒に、右手の隅に置いてある。此ベンチの近くには、足臺や、足掛や、馬鹿に大きな轆轤のついてる鞭の樣な繊細な器械が一つ立つて居る。

これが穿齒錐だと分ると、諸君は戦慄する。而して左の方へ目を移すと、諸君は他の窓を見る事が出來る。其窓の下には、吸取紙と日誌とが置いてある書物卓子(ライテング、テーブル)と椅子とがある。戸の方へ寄つたテーブルの次には革を被せた長椅子がある。諸君の右の方の反對の壁は大部分長い書棚で一杯になつて居る。治療臺は諸君の前に近く、その左方の手近なところには器械箪笥がついて居る。醫療上の家具器械はすべて新らしくて、壁紙の意匠は請負師の好みで、花綵(フエスツーン)と甕の模樣になつて居る。絨氈の圖案は花牡丹の花束がシンメトリカルについて居て、硝子の瓦斯燈には硝子玉の瓔珞がついて居る。煖爐棚の兩端にある鍍金の縁のついた淺黄色の飾燭臺も亦硝子玉の瓔珞でかざり立てられて居る。それから其二つの燭臺の眞中には、硝子の

被覆をかぶつた合金の置時計がある。(その側に亞米利加製の安時計が無雑作におつぽり出されてあるが、之が丁度正午十二時を指して居て、前の置時計の不用な事をはつきりと喚舌り顔である)。以上ならべた種々なものは、此煖爐棚を小さな持佛堂といつた心地にする、黒の大理石と共に、ヴイクトリア朝初期の商人好き、金錢崇拜、聖書の迷信、貧乏もこはいが地獄も怖いといふ兩立しない心、藝術、戀愛、羅馬加特宗の熱情家に對する本能的憎惡。

引括めて、産業革命の初期に於る富豪政治の最初の産物をしのばせる。

丁度今此室を占領して居る二人の上には、この樣な傳説の影も見えない。その一人は小さい極綺麗な婦人で、極挙奢な派手なつくりをして居るその小さな體格は、室の容子よりはずつと時代が新らしくて、まだ十八になるかならずだ。此可愛い小さな人間は、たしかに此の室のものでない處か、此の國のものでもない。何故ならその皮膚は極こまかだが顔色は英國よりもつと暑い日にやけてビスケット色になつて居る。が、極精細な觀察者が見ると、兩者の間に連絡はあるのだ。といふのは、此婦人は手に水のコップ

なもつて居る。而してそのキッと結んだ小さい口と、妙に角張た眉毛との上へには、忽ち霧れ行く古武士的強情の雲がかゝつて居るからだ。若夫れ命宮の筋をすこしでもその眉間から辿る事が出來たら、ある坊さんは、狼の衣を着た羊として此婦人を見やうとするかも知れぬ――此婦人の上衣は馬鹿げて綺麗なのであるから――が、その雲が消えてしまふと、其口元は小猫の口元のやうに悪い考へなぞは綺麗に見えなくなつてしまふ。

歯醫者は三十そこ〳〵の若い男、療治が巧く行つたので、われながら大滿足で、じつと婦人を見つめて居る。此男打見た處大して專門家らしい印象を與へない。それに新開業の歯科醫が患者を探して居るといふ醫師らしい容子は、まだ位置が定らず、たゞ歡興はかりさがして居る若い者のお里を見せる、伸氣な元氣な容子に被されてしまつて居る。其擧動にも落着がないといふのでは無い。たゞ其大きな鼻の孔は、それが滑稽家の落着であるといふ刻印を打つて居る。其目ははつきりして、快活で、氣になるほど小さい。額は立派で、奥行が廣く、鼻と顎とは武士的に見事である。之を要するに、愛

嬌のある、目につく若い者で、老練家は此先生の將來をトして、可成幸運になると見るに相違ない。

若い婦人　（歯科醫にコップを渡しながら）難有う。（ビスケット色には似ず、すこしも外國の訛はない）。

歯科醫　（器械算筒の棚にコップを置きながら）これがわたしの口あけの歯です。

若い婦人　（吃驚して）あなたの口あけ！　あなたの治療つてものは、妾が初めてだと云はうとして居らつしやるの。

歯科醫　どんな歯科醫だつて、だれかを手初めにしなけりあなりません。

若い婦人　さうね、病院で誰か、お錢を拂はない人を。

歯科醫　（笑ひながら）いや、病院は別です。僕はたゞ自宅で治療す

る歯の事を云つてるのです。あなたは何故わたしに瓦斯をつかはせなかつたのです。

若い婦人　あなたは二圓五十錢別にもらひたいと云つたでせう。

歯科醫　（心地を悪くして）　あゝ、そんな事をいふもんぢやありません。それでは私は、二圓五十錢のために、あなたを痛い目に逢はせたやうです。

若い婦人　（すまして不作法に）　えゝ、あなたわたしを痛い目に逢はせたわ。（立上り）。逢はせない譯が無いぢやありませんか。ひとを痛くするのはあなたの職業ですもの。（男はこんな風に扱はれるのを面白がつてる。彼は器械を清め、それを置きかへやうとして、ひそかに笑ひかける。婦人は衣裳をふるつて、キチンとする。それから不思議さうにまはりを見て、窓の方へ往く）。こゝいらの部屋からは、海をよく見晴しますね！隨分金がかゝるでせう。

歯科醫　えゝ。

若い婦人　あなた、こゝの家をのこらず有つて居らつしやるの、えゝ。

歯科醫　いゝえ。

若い婦人　（卓子の前にある椅子を傾げて、一本の脚でそれをぐるぐるまはしながら、じつと見つめて）あなたのところの道具はみんな新らしいのぢやないんでせう、えゝ。

歯科醫　大家のです。

若い婦人　そのかけ工合のいゝ車椅子も大家さんがもつてるの。（と、治療室を指す）。

齒科醫　いゝえ、それは月賦制度で買つたのです。

若い婦人　（見くびつた容子で）妾もさう思つたの。（此以上に結論の種を探さうと、四圍を見まはして）あなたさう長くこゝに住んでは居ないんでせう。

齒科醫　六週間。もう其外に御聞きになりたい事はありませんか。

若い婦人　（このあてこすりも婦人には一向利かぬ）御家族はあるの。

齒科醫　私はまだ結婚しません。

若い婦人　無論して居ない事は、誰にだつて分りますわ。わたしはね。妹さんとかお母さんとか、さう云つた方がありますかつて、聞くつもりだつたの。

齒科醫　この家には居ません。

若い婦人　ふむ！あなたこゝに六週間も居て、わたしが最初のお客では、商賣はあんまり盛んぢやないのね。

齒科醫　まだ、いけません。（男はまはりをキチンとして抽斗をしめる）。

若い婦人　まあ、運をよくして上げたいわ！（巾着をとり出し）二圓五十錢つて仰有いましたね。

齒科醫　二圓五十錢です。

若い婦人　（一クラオンの銀貨をとり出して）あなたは何でも二圓五十錢づゝ取るの。

齒科醫　えゝ。

若い婦人　何故。

齒科醫　それがわたしの規則です。わたしは所謂二圓五十錢齒科醫なるものです。

若い婦人　まあ、綺麗だ事！ぢやあ、こゝへ置きますよ！（二圓五十錢銀貨をもつて）綺麗な、新らしい二圓五十錢の銀貨！あなたの初めての御禮！人の齒をでし〳〵やるもので、それへ穴をあけて、時計の鎖へつけてお置きなさい。

齒科醫　ありがたう。

女中　（戸口に現はれ）お嬢樣の御兄弟が。

小さな綺麗な男がいそ〳〵と入つて來る。一目見ても若い婦人の双生兒の兄弟と分る。テルコタ色のカシミヤの三つ組揃ひ、上品な仕立のフロックコート、裏には焦茶の絹をつけたのを着て、手には焦茶の高帽とそれに調和のいゝ鞣皮の手套をもつて居る。妹と同じ華奢な、ビスケット色の顏をして、同じ樣に小作りである。が、筋肉はしなやかで、强壯で、行動は活潑、言語は見かけによらず底力があつて、鋭い、態度、風采いづれも申分なく、此男の倍の年配の人も羨ましく思ふ位だ。柔和で落着いてるのが、此男の特徵で、あるが、併し之はその眞相をうかゞつて見ると、單に少年時代の人慣れぬ容子を近代的にして見せたに過ぎない。この結果は年長者をして一驚を吃せしめ、こんな容子を嫌ひな青年には鼻持もならないものとされるのだ。彼は敏捷そのものであつて、こゝへ入つて來る刹那に、もう一つの話題をもつて居るのだ。

若い紳士　僕あ、丁度うまい時間に來たらう。

若い婦人　うーむ、もう濟んだわ。

若い紳士　泣いたかえ。

若い婦人　あゝ、隨分いやだつた。ヴァレンタインさん、これは妾の兄弟のフィルです。フィル。これはヴァレンタインさん。新開業の齒

科醫の。（ヴァレレタインとフィルとは互に挨拶する。女は前へ出て、たゞ一息に）此方はたつた六週間しかこゝに居らつしやらないの。而して獨身なの。この家は自分のものぢやなつくつて、造作は大家さんのものなの。でもあの商賣道具は月賦で買つてるの。この方はね。たつた一邊でうまくわたしの齒を拔いたの。そしてわたしたちは親友なの。

フィリップ　盛んに質問を發したらうな。

若い婦人　（そんな事は、妾には出來ませんといふ風に）いゝえ。

フィリップ　それあ結構だつた。（ヴァレンタインに向ひ）有りがたう。何卒おかまひ下さらない樣に。ヴァレンタイン君。實は僕たちは今まで英國へは來た事はないのです。阿母の話では、英國の人

は、とてもわれ〳〵には立きれないつて事です。一緒に來て、われ〳〵と食事をしようぢやありませんか。（ヴァレンタインは、双方の交情がとん〳〵拍子に進んで行くのに驚いて喘ぐ。が、双生兒の話が早くつて引切りなしなので、口を出す機會が無い）。

若い婦人　ねえ。さうなさい。ヴァレンタインさん。

フィリップ　マリー！ヌ・ホテルで――一時半に。

若い婦人　わたしたちも、阿母にいへますわ。立派な英國紳士が、わたし達と一緒に食事をする約束をしましたつて。

フィリップ　もう何にもいひ給ふな。ヴァレンタイン君、君、來るだらう。

ヴァレンタイン　何にもいひ給ふな！私は何にも云やあしません。が、一體あなた方はどなたですと伺つて見たい。丸つきり知り

もしない方お二人とマリーヌ、ホテルで食事をするなんて事は、私には實際出來ない事ですからな。

若い婦人　（無遠慮に）うーう！何を云つてるの六週間に一人の患者しか無いくせに！大した違ひはないぢやありませんか。

フィリップ　（大人ぶつて）ドーリー、左樣ぢやあない。僕の人情に關する智識は、ヴァレンタイン君の判斷を是認する。彼人のいふ通りだ。僕はドロシー・クランドン嬢、通稱ドーリーを紹介します。（ヴァレンタインは、ドーリーに挨拶する。ドーリーは彼に點頭く）。僕はフィリップ・クランドンと申します。われ〳〵はマディラから參つたものですが、十分身分のあるもので、先づ今日迄のところでは。

ヴァレンタイン　クランドン！では、貴君方はあの、何の御親戚で——

ドーリー　（思ひもかけず、情なさうに叫び出す）。えゝ、左樣ですよ。

ヴァレンタイン　（吃驚して）何と仰有る？

ドーリー　えゝ、親戚ですよ、親戚ですよ。もうみんな徒事だわ、フィル、英吉利ではみんな妾たちの事を知つてるわ。（ヴァレンタインに向ひ）あゝ、有名な人と親戚になつてるので、どこへ行つてもわたしたちは自分の價値だけには見てもらへない。それがどんなに癪に障るかつて事は、あなたには分らないでせう。

ヴァレンタイン　が、失敬ですが、わたしの考へてる紳士は、有名ではありません。

ドーリー　（彼をじつと見て）紳士！（フルもまごつく。）

ヴァレンタイン　えゝ、ひよつとかしたら、あなたがニューブレー・ホール

のデンスモーア・クランドン君のお娘御ではありますまいかと、お尋ねしようとした處でした。

ドーリー　（氣の抜けた樣に）いゝえ。

フィリップ　おい、ドーリー。おまへはさうでないつて事を如何して知つてるね。

ドーリー　（絶叫する）。あゝ、わたし忘れた。勿論、さうかも知れない。

ヴァレンタイン　御存じはありませんか。

フィリップ　ちつとも。

ドーリー　それが所謂利口な子は——

フィリップ　（ドーリーの語を横取りして）しッ！（ヴァレンタインはぎよつとして立上る。フィリップの出した聲は、ほんの瞬間ではあつたが電光一閃帛を眞

二つに劈ざいた樣に響いた。これはドーリーの不謹愼を防止する練習が久しく積んだ結果であるのだ）。ヴァレンタイン君、實は僕たちは有名なランフレー・クランドン夫人——マディラでは文名嘖々たる女流作家の子供なんです。如何なる家庭も夫人の著述がなくては完全ぢやあないのです。そこで僕たちはその著述から遁れるために英國へ來たのです。其著述の名は二十世紀論集といふのです。

ドーリー　二十世紀の料理法。

フィリップ　二十世紀の信仰。

ドーリー　二十世紀の衣服。

フィリップ　二十世紀の禮法。

ドーリー　二十世紀の小兒。

フィリップ　二十世紀の兩親。

ドーリー　クロースの薄表紙は金壹圓。

フィリップ　丈夫向家庭用のリンネル表裝は金四圓。どんな家庭でも必須缺くべからずだ。ヴァレンタイン君、まあ讀んで見たまへ、君の心を進歩せしめるよ。

ドーリー　でも、わたしたちの居なくなるまで讀んではいけなくつてよ。

フィリップ　全くだ。僕たちは寧ろ進歩しない心の人間が好きだ。僕たち自身の心もその生新無垢の狀態にあるのだ。

ヴァレンタイン　（疑はしけに）ふむ！

ドーリー　（不思議さうにヴァレンタインの話をくり返して）ふむ！フィル、此人はどつちかといふと心の進歩した人が好きらしいのよ。

フィリップ　それなら、この人をうちの外の人間に紹介するんだな。二十世紀の婦人、姉のグローリアに。

ドーリー　（夢中になつて）自然の傑作！

フィリップ　學問の娘！

ドーリー　マディイラの誇り！

フィリップ　美の模範！

ドーリー　（突然平凡な句調になつてしまつて）くだらない！顏は好くないわ。

ヴァレンタイン　（自棄になつて）わたしも一言云はしていたゞけませ

うか。

フィリップ　（丁寧に）失敬。さあ、どうぞ。

ドーリー　（極やさしく）御氣の毒さま。

ヴァレンタイン　（阿父ぶつて二人を扱はうとして）私はあなたがたの樣な

お若い方たちに對して、御注意してあげなければならない――

ドーリー　（又口を出して）おや〳〵、結構ですね。あなた幾歳。

フィリップ　三十越してる。

ドーリー　まだよ。

フィリップ　（斷乎として）越してるとも。

ドーリー　（力を入れて）二十七よ。

フィリップ　（自若として）三十三。

ドーリー　出たらめだわ！

フィリップ　（ヴァレンタインに向ひ）君に伺ふとしよう。ヴァレンタイン君。

ヴァレンタイン　（抗がふやうに）えゝ、實は――（あきらめて）三十一です。

フィリップ　（ドーリーに）おまへ違つてるよ。

ドーリー　汝さんだつて。

フィリップ　（忽ち眞面目になつて）ドーリー、僕たちは禮儀つてものを忘れて居た。

ドーリー　（後悔した風で）ほんたうに、さうね。

フィリップ　（云ひ譯らしく）ヴァレンタイン君、御邪魔をしたね。

ドーリー　あなたはわたしどもの心を進歩させやうとなすつたのでせうねえ。

ヴァレンタイン　實はその、あなた方の――

フィリップ　（先くゞりをして）　僕たちの容子を？

ドーリー　妾たちの行儀を？

ヴァレンタイン　（あはれな容子で）　まあ、私に喋舌らせて下さい。

ドーリー　また十八番。でもわたしたちは全く喋舌り過ぎるわね。

フィリップ　ほんたうだ。默れえ、おい。（治療室の臂掛へ腰をかける）。

ドーリー　うーむ！（卓子の椅子に腰かけ、指の尖にて唇をとぢる）。

ヴァレンタイン　有難う。（隅のベンチからストールをもつて來て、兩人の間に置き、裁判官の如き態度で腰をかける。と、兩人は非常に眞面目な容子をして彼に對す。彼はまづドーリーに話しかける）。先づ最初におたづねしたいのは、あなたは是迄英國の海水浴場へお出になつた事があるか

如何かといふことです。（ドーリーは靜かに、眞面目に首を振る。彼はフィルに向くと、フィルは急がしく、意味ありげに首を振る）。私も左樣だらうと思ひました。そこでクランドンさん。お互ひに今日親近になつたばかりです。が、御しやべりは大分しました。そこで英國の海水浴場の生活とは如何なものか、あなたがたはそれを御存知で居らつしやらないといふ事を確めるだけの材料は、十分に集め得たと思ひます。なあに、それは行儀とか容子とかいふ問題ではありません。其點については、われ〳〵はマディラでは迚も分らん程の自由を享有して居ます。（ドーリー烈しく首を振る。）えゝ、全くですよ。ドクレスシ卿の妹さんが半ズボンで自轉車に乘る。牧師の細君が衣服改良を主張して衞生長靴を

穿く。（ドーリーはそつと自分の靴を見る。ヴァレンタインはその擧動を見つけて機敏に云ひ足す。）いや、私の云つてるのは、さういふ種類の靴では無いのです。（ドーリーの靴は姿をかくす）。われ〳〵は英國に於る衣服や行儀の事は餘りいひたくない。一體われ〳〵はい服裝をしたり、行儀に關つたりする國民では無い。が――如何でせう、わたしの正直な話を聞いて下さいますか。（兩人點頭く）有難う、そこで海水浴場では、誰にしても、あなたがたと一緒に歩くところを人に見られる樣になる前に、是非あなた方にもつていたゞかなければならないものが有ります。それは卽ち阿父さんなるものです、生きて居るにしても、死んでるにしても。（彼は力をこめて、兩人が互ひ違ひに見る。兩人は殉教者の如く彼と目を見合す）。

あなた方は社交的武裝の缺くべからざる部分を忘れて居らつしやる。（兩人肅然として黙く）。そして遺憾ながら、若しあなた方も、しばらく此處に御逗留なさる樣なら、折角の御親切ではあるが、私は晝餐の御招待には應じかねますと申上げなければなりません。（彼はもうおしまひだといふ容子で立上り、ベンチの側へストールを戻す）。

フィリップ　（慇懃に立上り）行かう。ドーリー。（ドーリーに手を出す）。

ドーリー　左樣なら。（兩人は容態ぶつて一緒に扉の方へ行く）。

ヴァレンタイン　（すつかり氣の毒になつて）まあ待つて下さい、待つて下さい。（兩人は手を組んだまゝ立止つて振向く）。あなた方には、すつかり面目なくなつてしまふ。

ドーリー　それああなたの良心がさせるのです。わたしたちの所爲ぢやないわ。

ヴァレンタイン　（奮然として醫師さんらしいお上手な容子を一擲して）わたしの良心！わたしの良心はわたしの零落のもとであつたのです。まあ聞いて下さい。わたしはこれまで二度も英國の方々で、尊敬すべき醫者として開業しました。わたしは二度とも良心にしたがつて働きました。而して自分の患者に對して、其人たちの聞きたがる事をいはずに飾氣の無い正味ばかりを云ひました。結果は零落です。私は今齒科醫として、二圓五十錢均一の齒科醫として開業した。而してもう良心とは緣切になつてしまつた。これが私の最後の機會です。私は移轉のために一錢

も失なつた。私はまだ家賃を拂つてない。私は信用で食つたり、飲んだりして居る。大家は猶太人の樣に金持で、釘のやうに頑固だ。そして私は六週間かゝつて二圓五十錢手に入れた。若しこゝで私が髮毛一筋たりとも、立派な人間の道から踏外したら、私はもうおしまひです。かういふ境遇の下に居るものに對して、自分の生の親も知らない人が、私と一緒に食事をしようなんて賴むのは正當な事でせうか。

ドーリー　兎に角わたしたちの祖父さんはリンコルン寺院の坊さんでしたよ。

ヴァレンタイン　（水平線上に帆影を見つけた流竄の水夫のごとく）えゝ、あなたがたには祖父さんがお有りになりますか。

ドーリー　たつた一人。

ヴァレンタイン　あなた、えゝあなた、何だつて前にそれを打明けて下さらないんだ。リンコルンの坊さん！それなら無論よろしい。一寸御免下さい、着物を着かへるあひだ。（一飛びに扉に達して姿を消す。ドーリーとフィルとはじつと其後を見詰め、やがて互ひに顔を見合す。扨二人は見物人が居なくなつたので、ぐたりとなつて、忽ちだらしがなくなる）。

フィリップ（ドーリーの手を投げる樣に離して、不機嫌に治療室の方へ行きかけ）あの身代限りの居合抜野郎め、勿體ぶつて御馳走になつて遣はさうとぬかしやあがる――こんな立派な御馳走に出つくわすのは、幾月目か知れたもんぢやあないのに。（椅子を蹴る。其椅子がヴァレンタインかなんぞの樣に）。

ドーリー　あんまりだわ！もう我慢がならない。フィル。英國では誰でも阿父さんがありますかなんて、のつけから聞くんだもの。

フィリップ　おれも我慢がならない。阿母さんに聞かしてもらはなけりやならない。阿父さんはどんな人だつたのか。

ドーリー　それとも阿父さんが今でもどんな人であるかね。阿父さんは生きてるかも知れないわ。

フィリップ　生きてゝもらひたくないね。生きてる人間なんかに、阿父さんになられたくないね。

ドーリー　でもお金持かも知れないわ。

フィリップ　怪しいね。人情に關する僕の智識は僕をして如斯いふ

ことを信ぜしめる。彼にして苟くも金持であるならば。さう容易に可愛ゆい一家を棄てはしなかつた筈だ、とにかく僕たちは、好い方面から物を觀なけりやならん。確かに死んでるよ。

（爐縁の側へ行つて股を擴げて暖爐へ後向に立つ。女中入り來る。兩人は見物人が出來ると、忽ちもとのはしやいだ容子になつて、又威張り出す。）

女中　あの御嬢さま、御婦人がお二方、あなた樣にお目にかゝりたいと仰有いまして。

阿母さまに、御姉さまでございませう。

クランドン夫人と、グローリヤ入來る。ラクンドン夫人は四十歳と五十歳との間で、ポチャ〳〵して樂肥りになりかけて居る。此人は結婚後もうおしやれなどはしないといふ、昔流の主婦の風を學び、家に居ても帽子を被るといふ古風な事をして居たらしいにも拘らず、當年の佛はまだ艶やかに殘つて居る。その身のこなしはまことにしなやかであるが、それも其筈だ。

美容術などゝいふ近代的なものが出來る前には、婦人たちは踊の師匠や、梵れ臺でもつて、行儀の一部としてこんな事も習つたものだ。もう白くなりかゝつてる銀褐色の縮れた髪は、眞中から分けてあつて、編んだ尖に結び玉が出來てる。そこで或年頃の目の利く人たちは、クランドン夫人こそは、立派な個人性と趣味とをもつて居て、今は世間から忘れられて居るが、此人の娘時代にはやつた髷の形に對してさへ、何處までも反對しやうとして居るのだと考へる。一口に此婦人は衣服や、起居擧動にかけると、年にあはして大分舊式であるが、併し人格とか知能とかいふものを見せつけ樣とする熱心な態度にかけたり、個人的愛情の十分に發達した婦人といふよりも、教養ある婦人としては、同時代（千八百六十年から八十年迄）の婦人の急先鋒である。其聲と容子は、極親切で物やさしい。そして子供だちは彼に尊敬を示さうとして、折々癪に其愛情を見せつけると、夫人は心からそれを受け容れて居る。が、それにしても、單に個人的感情を見せつけられるのは、ひそかに迷惑とする處なので、此人の愛情は個人的でなくして博愛主義である。

而してその深く感ずるところのものは、社會問題と其理論とであつて、個人の事などはどうでもよいのだ。たゞ此理屈つぽい事と、馬鹿げて個人的祕密主義である事とは、自分の子供のグローリヤやフィルに對する關係をして、さながら自分と他人の子供との關係に過ぎない程冷淡にして居るが、併しドーリーにかゝると、それさへ全然だめになつてしまふ。此人がドーリーにいふ言は、悉くドーリーの不行儀を叱りつけるためであるのだが、尙その聲にはたしかに慈愛が含まれて居る。そして幾年となくこんな叱り方をして居たゝめに、ドーリーはもう始末におへない程甘つたれになつたのは、毫も怪しむに足らない事だ。

グローリヤはまだやつと二十を越した計だが、母、親以上に厄介な人間だ。癇癖のつよい負けず魂がいら〳〵しては慷慨悲憤するといふ思ひ上つた傲慢の權化で、その負けず魂は、まだ年が若くつて、經驗の足りないところから矢鱈に募り出すが、一面口も八丁手も八丁の弟妹たちに始終冷かされるといふ危難な事があるので、われ知らず幾らかおとなしくなつて居る。彼は阿母とは反對に、たゞ情の人である。而してその情と、例の意地つ張と氣むづかしやとが衝突して、凍るが如き冷然たる態度となる。之が醜婦である。つたら、全く堪つたものでは無いのだが、グローリヤは、愛嬌のある婦人だ。その濃い栗色の髪淺黑い色、長い睫、時々星のやうにかゞやくどんよりした眼色の目、華奢な形のよい唇、小ぢんまりして、しなやかな、それで男らしくむつちり肉の其姿は、的確に他の官能と想像に訴へるところがある。若し德性がその美しい額の上に現はれて居なかつたら、あゝ崇高く現はれて居なかつたら、人はこの婦人を極めて危險な娘だと云ふだらう。男の裁縫師が作つた牡丹色の對の衣服は、後向では舊式の樣に見えるが、前から潮色の肌付が見えると、たゞ一呼吸に舊式を打破してしまつて、彼の双生兒同樣に、平凡な海水浴場に居る連中などゝは、まるで飛離れたものになつてしまふ。クランドン夫人は、どんな人がこゝに居るか知らと、四圍をみまはしながら入つて來る。グローリヤは弟妹達なぞは何とも思つて居ないといふ風で、わざと兩人を見ない樣にして、そろ〳〵窓の方へ行き、心は遠くに彷徨ひな

から、窓から外を見る。女中は室を出ずに、扉を締めて待つて居る。

クランドン夫人　おや、子供たち、齒痛は如何したね、ドーリー。

ドーリー　治つちまつたの、有難いことには。引つこぬいちやつたの。（治療室の踏板にかける。クランドン夫人は卓子の前の椅子を取る。）

フィリップ　（眞面目ぶつて、煖爐の側から口を出す）。而してその齒科醫、身分の高い第一流の醫師さまが、一緒に食事をして下さる事になりましたよ。

夫人　（心配さうに女中を見て）フィル！

女中　あの、失禮でございますが、奥さま。妾はヴァレンタイン先生を御待申して居るのでございます。御手紙が參つて居りますので。

ドーリー　何處から來てるの。

夫人　（吃驚して）ドーリー！（ドーリー指の先で唇をつまむ。おしやべりを無理に抑へつけて）。

女中　なあに、大家さんからでございます。

ヴァレンタインは、紺のセルヅの三組背廣に麥藁帽子を手にもち大急ぎで呼吸を切りながらも、大元氣で歸つてる。グローリヤは窓から向き返り、冷然たる容子で彼を注視する。

フィリップ　御紹介しませう、ヴァレンタイン君。阿母のランフレー！クランドン夫人です。（夫人は挨拶する。ヴァレンタインは自重した、物慣れた挨拶する。）姉のグローリヤ。（グローリヤは冷かに容態ぶつて挨拶し、長椅子にかける。ヴァレンタインはたゞ一目で思ひつき、情けない程まご〳〵してしまふ。彼はきまりが惡さうに指で帽子をはじき、グローリヤに對して横

目づかひに挨拶をする。）

夫人　今日晝餐に御目にかゝられますのですつてね。ヴァレンタインさん。

ヴァレンタイン　有難う――えゝ――あなたの方でさへ御構ひなければ――あのなに、あなたが御親切に――（癇癪聲で女中に）何だ。

女中　大家さまが、お出かけ前にあなたにお話し申上げたいと仰有います。

ヴァレンタイン　おい、患者が四人も居るとさういへ。（一同吃驚する。但しフィルだけは落ちついたものだ。）たつた二分間も待てないといふんなら、私は――私がそつちへ行つて一寸逢ふとしよう。（萬事それとなく小間使ひの機轉に依頼して）私はいそがしい。が、逢ふには

逢ふと云つて置け。

女中　（元氣づけるやうに）承知致しました。（退場）。

夫人　（立上らうとして）お邪魔致しましたね。

ヴァレンタイン　如何致しまして。如何致しまして。あなた方が居て下さるのは、私にとつて最大の味方です。といふのは、私は六週間分の家賃を借りてゐるんです。而して今日まで一人も患者がなかつたのです。ところが外見だけでも、かう商賣が繁昌してる樣に見えますと、大家との會見がぐつと圓滑に行かうといふものです。

ドーリー　（腹立しげに）あゝ困つた人ね、あなたは、みんな喋舌つてしまふなんて。わたしたちは、あなたを第一流の立派な醫師さ

まといふ事にしやうとして居た處ぢやありませんか。

夫人　（吃驚して）あゝドーリー〳〵！おまへ、如何してそんなに失禮なの？（ヴァレンタインに）ヴァレンタインさん、どうぞ御免下さい、子供たちは實に亂暴なので。

ヴァレンタイン　どう致しまして。私は平氣でございます。五分だけ御待を願つては失禮でせうか、あの階下に居る大家を追拂ふまで。

ドーリー　早くして頂戴、お腹が空いてるんだから。

夫人　（再び叱る樣に）ドーリー、おまへ！

ヴァレンタイン　（ドーリーに）承知致しました。（夫人に）有難う、手間は取りません。（行かうとして向き返る時、そつとグローリヤを見る。グローリヤは眞面目に彼を見て居る。彼はまご〳〵して）私は——えゝ——えゝ——左樣です——有難う（やつと室から出たが、憐れな容子である。）

フィリップ　氣がついたかえ。（グローリヤに指して。）一目の戀だ。グローリヤ、おまへさんの採集の中へ、あの男の頭の皮も入れることが出來るよ。

夫人　しつ——しつ、フィル、後生だから。聞えたかも知れないよ。

フィリップ　聞えるものですか。（場面相應の身繕ひをして）まあ御聽きなさい、阿母さん。（ベンチからストールを取り、ヴァレンタインの先刻の威張かたを其儘に、室の眞中に威氣揚々とかける。ドーリーは治療臺の踏段の位置が、此場合威嚴を缺くと思つたので、大氣取で決然と立上る。而して窓の方へ行つて、卓子の端へ背向に兩手をかけて立つ。夫人は如何なる事かと二人を見る。グローリヤは耳を立てゝ聞かうとする。フィルは背伸をし、指の關節を双方等

しく膝の上へ置き、いよ〳〵話に取かゝる)。ドーリーと僕は此頃しきりに或事を話し合つて居たんです。が、僕の人情に關する智識によつて判斷するに、僕はどうも――いやわれ〳〵はどうも、あなたには(この語に烈しく力を入れて)能く分つて居るとは思へない――。

ドーリー　(一飛に卓子の端へ腰をかけて)わたしどもがもう大人になつたつて事を。

グランドン　ほんたうにかえ。妾はおまへ方にぐづ〳〵云はれる樣な事をした事があるかえ。

フィリップ　併し、もすこし僕たちに打明けて下すつても、よからうと思ふ事が起りかけたのですがね。

夫人　(立上る。年効の落着も忽ち失つて、妙に硬くなつた激昂の色が現はれる。)容體ぶつて居ながらも頑固らしく、淑女然としては居るが意地つ張らしいところは、女權擴張運動元老の容子をそのまゝである。)フィル、氣をおつけ。いつもわたしの敎へてた事をお忘れでない。フィル、世間には二種の家庭があるがね、おまへの人情の經驗は、今日迄のところ、たゞ其一つしか分つて居ない。(美辭學的に)おまへの知つてる方は各人相互の尊敬を基礎として居るのです。即ち家庭の各自の權利と、其人々の個人の祕密(この「祕密」といふ語には非常の力を入れる)に對して、その權利を認識する事を基礎として居るのです。ところがおまへは平生それを享有して居るから、そんな物は何の價値もない、あたりまへの事だと思つて居るらしい。併し(皮肉

に毒々しく、）外にもう一つの家庭があります。そこでは夫が細君の手紙を開封し、細君は一文の小遣、一分の時間でも、一々調べ上げさせられ、女は又自分の小兒に對して同じ傳をやる。そこには祕密な室の、神聖な時のといふものはあらう筈なく、義務も、服從も、愛情も、家庭も、道德も、宗教も、皆恐ろしい壓制で、生活といふものは折檻、詐僞、强迫、謀叛、嫉妬、邪猜、讒訴――わたしにはもう云へない、が、おまへは幸ひなことに、そんな事は何にも知つちや居ない。（夫人は喘きながら腰かける。ゲローリヤは目を光らせて聽いて居る。母の奮慨に同情しながら。）

ドーリー　（美辭的にはやれないので）二十世紀の兩親の自由の章の諸所を見よ。

夫人　（ドーリーが此嘲弄の語にさへも慰められて、いとしさうに其肩を撫で）ドーリーや。阿母さんにはこんな眞面目な事はないんだがね、併しそれを汝がたゞの冗談としか思へないといふのは、わたしや眞實に嬉しいんだよ。（さらに屹となつてフィルに向ひ）フィル、わたしは今までおまへが個人として爲てる事については、何も聞いた事はなかつたよ。それをおまへはわたしに聞かうとするのぢやないの。

フィリップ　併し僕たちが聞きたいと思ふ事は、僕たちにもあなたにも關係のある事だと云つてもよからうと思ひます。

ドーリー　それに、いろ〳〵な疑問をどつさり詰込んで居ては、阿母さんの爲めによくないわ。えゝ、詰め込んで居ましくわ、阿母さ

ん。まあ、御覽なさい、それが又わたしの方へやつて來ておつそろしく破裂してしまつたのだから。

夫人　おまへたちは何處までも聞きたさうだね。ぢやあ云つて御覽。

ドーリーとフィリップ　（同時に始める）誰が――（二人は言葉を切る。）

フィリップ　まあお待ち、ドーリー。この仕事の指揮は、僕がするか、おまへがするか。

ドーリー　汝さんだわ。

フィリップ　ぢやあ口を結んでおいで。（ドーリー文字通りに口を結ぶ。）問題は簡單なのです。あの居合抜野郎が――

夫人　（止めて）フィル！

フィリップ　齒科醫といふのはいやなことばだなあ。あの、いや、金塡の先生、僕たちはニューブレー・ホールのミスタア・デンスモーア・クランドンの子供ぢやあないかと聞くんです。二十世紀の作法の議論中にある敎訓にしたがひ、尙僕たちが必要もない詐をつく度數を減さうとして、あなたが始終口にして居らつしやる戒めにしたがつて、僕たちは正直に答へました。僕たちは知りませんて。

ドーリー　わたしたちは實際知らないんですわねえ。

フィリップ　しつ！その結果、あのゴム細工の職人め晝餐の招待に應ずるのに、ひどくおつくうがりました。その癖あいつはこの二週間といふもの、お茶とパンとバタの外、何にも喰はなかつたら

うと思ふんですがね。そこでゞすね、僕の人情に關する智識によつて、僕たちには阿父さんがあつて、あなたはそれが誰だか知つて居られるだらうと、僕は信じたいと思ふのです。

夫人　（また心配になつて）お默んなさい、おまへの阿父さんはおまへにも、妾にも關係はありません。（烈しく）それで澤山です。（双生兒は默つてしまつたが、滿足はしない。二人はしよげてしまつたが、熱心にこの爭論を聞いて居たがグローリーヤは、突然中へ入る。）

グローリヤ　（進み出して）阿母さん、わたしたちにはそれを知る權利があります。

夫人　（立上り、グローリヤに眞向になり）グローリヤ！『わたしたち』だつて！『わたしたち』といふのは、誰の事なの？

グローリヤ　（しつかりと）わたしたち三人。（語調は明白である。グローリヤは初めて母と力競べをはじめ出したのだ。が、双生兒は忽ち敵方へ變心してしまふ。）

夫人　（癪にさはつて）『わたしたち』といふと、是までおまへは、おまへとわたしの事を云つて居たのだつたね、グローリヤ。

フィリップ　（決然として立上り、ストールを推やつて）阿母さんは心もちを惡くしたでせうね、もう止しませう。あなたが氣にしやうとは思はなかつたんです。僕あもう知らうとは思ひません。

ドーリー　（テーブルに腰をかけて）ほんたうに知りたいとは思ひませんわ。あら、そんな顏をするものぢやなくつてよ、阿母さん。（腹立しさうにグローリヤを見る。）

夫人　（あわてゝハンケチを目にあてゝ、再び腰をかけながら）有がたうよ。
あり難う、フィル。

グローリヤ　（頑然として）わたしたちは聞く權利をもつて居ます、阿
母さん。

夫人　（苦々しげに）あゝ！おまへは強情を張るのかえ。

グローリヤ　あなたは、わたしたちに知らせたくないと思つて居ら
つしやるの。

ドーリー　グローリヤ、もうお止しなさいよ。ひど過るわ。

グローリヤ　（落着き拂つた輕蔑の調子で）そんなに弱くなる必要はない。
ぢやないか。此紳士のこゝで出つくわした通りの事にね、かあ
さん、わたしも出つくわしましたよ。

夫人
ドーリー
フィリップ　一緒に　如何したといふの。
まあ、聞かして頂戴！
如何したのさ。

グローリヤ　別に何でもありませんがね。（三人から離れて、煖爐の側の
安樂椅子へ行き、殆ど三人に背を向けてそこへかける。三人が片唾を呑んで待
つてると、グローリヤは如何でもよいといふ樣な風を作つて肩越しに云足す。）
汽船の中で一等運轉士がわたしに結婚を申込みました。

ドーリー　嘘よ、わたしにだわ。

夫人　一等運轉士が！おまへ眞面目なの、グローリヤ。おまへ、
彼人に何と云つて。（思ひ直して）許して下さい、わたしにはそん
な事を尋ねる權利はなかつた。

グローリヤ　其答へは極明白です、自分の父の誰だかも知らない樣な婦人は、こんな申込みには應じられません。

夫　人　おまへだつて、其申込みを承知しようとは思はなかつたらうね。

グローリヤ　（少し横を向いて、聲を高め）　えゝ。が、わたしが承知したかつたとしたら！

フイリツプ　ドーリー、おまへもそんな面倒な目にぶつゝかつたかえ。

ドーリー　うーむ、わたし申込みを承知したわ。

グローリヤ　一緒に　承知した！

夫　人　叫び出す　ドーリー！

フイリツプ　（やれ〳〵、まあ！）

ドーリー　（天眞爛漫に）　あの人はそれあいやに齒にかんでゝよ！

夫　人　何だつて、おまへ、そんな事をしたの。えゝ、ドーリー。

ドーリー　冗談にでせう。あの人はね、指環をこさへるからつて、わたしの指の寸法をとらうとしたの。阿母さんだつて、同じ樣な事をした事があるでせう。

夫　人　いゝえ、わたしはしません。眞實はあの一等運轉士はわたしに申込んだのです。だからわたしは彼人に左樣云つてやつたのです。そんな事は、それを嬉しがりさうな若い女にしておやんなさいつて。彼人はわたしの忠告通りにやつたと見えるのね。（夫人は身を起し、煖爐の方へ行く。）　グローリヤ。わたし

はおまへに弱いものゝ様に思つて居られるのは、殘念でならない。併しわたしはおまへの聞きたがつてる事をいふわけには行かない。おまへがたはみんな若過ぎる。

フイリップ　これあひどく離れてる、二十世紀の主義からは。

ドーリー　（本文を引用する）『諸君の子供が質問し得べき年頃となるや否や、すべて彼等の問ひに答へよ、正直にその問ひに答へよ。』二十世紀の母を見よ——

フイリップ　第一頁——

ドーリー　第一章——

フイリップ　第一節。

夫人　まあ、おまへ達。わたしはね、おまへたちがそれを聞くのには、まだ若過ぎるとは云ひはしないのだよ。わたしは、祕密を打明るにはまだ若過ぎるといつたのです。おまへがたはほんたうに利口な子です、みんな左様です。併しわたしはね、おまへがたがまだ全然無經驗で、そのためにまるで同情の無い事を、却つておまへがたの爲めに喜んでるのです。わたしにはね、わたしが通つて來たゞけの事を、自身で通つて來た人にでなければ、どうしても話す事の出來ない經驗があるんです。おまへ方には、そんな事を打明けられる身分になつてもらひたくないの。併しこれからは、おまへ方が聞いてよい事できゝたい事は、聞かしてあげる様に、氣をつけようね。それでいゝかね。

フイリップ　また御小言だ、ドーリー！

ドーリー　わたしたちは同情がないんだつて。

グローリヤ　（椅子によりかゝり、じつと母を視上げて）　阿母さん、わたしは同情の無い人間にならうとは思つては居りませんよ。

夫　人　（愛情を含んで）　勿論そんな事はないよ、おまへ。それがわたしには分らないと思つてるの！

グローリヤ　（立上りながら）　でも、阿母さん——

夫　人　（少し引さがりながら）　えゝ？

グローリヤ　（執念ぶかく）　阿父さんがわたしたちに關係が無いなんて、馬鹿々々しうございますわ。

夫　人　（俄かに激昂して決然と）　おまへ、阿父さんを覺えてるかえ。

グローリヤ　（なつかしい懷舊の情に堪へない樣に思ひ沈んで）　はつきりは

分りません。覺えてる樣にも思ひます。

夫　人　（苦い顏して）　はつきり分らないの。

グローリヤ　えゝ。

夫　人　（落着いた力のある聲で）　グローリヤ。若しわたしがおまへを打つたら（グローリヤあとずさる。フイルとドーリーとは忌な顏をする。三人は夫人をじつと見て顏を背向ける。が、夫人は用捨なく言を續ける）——わたしがわざと、故意に、おまへを傷つけやうと思つて、その爲めに買つた鞭でもつて、おまへを打ぐりつけた事があつたら！おまへはそれを覺えてやうと思ふかえ？——（グローリヤは義憤的憎惡の叫び聲を出す）グローリヤ、若しわたしが彼人からおまへを引離さなかつたら、それがおまへの阿父さんに對する最後の思

ひ出になつたかも知れないんだよ。わたしはおまへの生涯から彼人を追つ拂つてやつた。おまへもどうぞ、もう二度と再びあの人の事なんぞを云はずに、わたしの生涯から彼人を追拂つておくれ。（ゲローリヤは身を戰はせ、須臾は兩手で顏を掩ふ。やがて戸口で人のけはひがするので、顏を背向けて、書棚の書名を夢中になつて見て居る樣な風をする。グランドン夫人は長椅子に腰をかける。ヴアレンタインは歸つて來る）。

ヴアレンタイン　お待遠さまでした。あの大家は全く變つた老父さんですよ。

ドーリー　（熱心に）あゝ、聞かして頂戴。いつまで拂ひを待つて云つて。

夫　人　（自分の子供の行儀に呆れて）ドーリー、ドーリー、ドーリー！つたら！そんなにいろ〳〵な事を聞くものぢやありません。

ドーリー　（眞面目に）御氣の毒さま。聽かして下さるでせうヴアレンタインさん。

ヴアレンタイン　あの男は家賃はまるで要らないといふんです。ブラジル胡桃で、齒をこわしたので、わたしにそれを見てもらひたいといふんです、而してそのあとで晝餐を一緒にやらうといふんです。

ドーリー　ぢやあ、その方をこゝへ連れていらしつて、直に齒を拔いておやんなさい。そして一緒にこの人も晝餐につれて行きませう。こゝへ連れて來る樣に、女中に左樣仰有い。（呼鐘の方へか

けて行つて、烈しくそれを鳴す。が、やがて突然疑念が起つて、ヴアレンタインの方へ向き、言葉を足す）その人は身分のある――眞實に身分のある方でせうね。

ヴアレンタイン　十分に。私見た樣なものではありません。

ドーリー　眞面目な印度人？（クランドン夫人かすかに喘ぐ。が、もう止める力は盡きてしまつた）。

ヴアレンタイン　眞面目な印度人！

ドーリー　さあ早く行つて、その人を呼んでいらつしやい。

ヴアレンタイン（疑はしげにクランドン夫人を見て）あの男はさぞ喜ぶでせう、若し――えゝ――

夫人（身を起し、自分の懷中時計を見て）晝餐には是非あなたの御友

達に御目にかゝりたいものですね。もしあなたが其方を承知さして下さる事が出來たら。それにしても、わたし今は其方を御待ち申して居るわけにはまゐりません。わたしは一時十五分前に、ホテルで昔の友達に逢ふ約束があるんです。わたし、十八年前に英國を出てからといふもの、その人には、一度も逢つた事はないのです。あなた御許し下すつて。

ヴアレンタイン　えゝ〳〵、奥さん。

グローリヤ　わたしも行きませうか。

夫人　いゝの。わたし、ひとりの方が好いんだよ。（夫人はまだ心配さうに出で去る。ヴアレンタインは夫人の爲めに扉を開け、自分もついて出る。）

フイリップ　（意味ありさうにドーリーに向ひ）ふゝむ！

ドーリー　（意味ありさうさうにフイルに向ひ）はゝあ！（女中はベルの返事に入來る。）

ドーリー　お年寄を御通し申しておくれ。

女　中　（まご〳〵して）お孃さま？

ドーリー　齒の惡いお年寄よ。

フイリップ　大家さんだよ。

女　中　クランプトンさんでございますか。

フイル　あの人はクランプトンといふのか。

ドーリー　（フイルに）リュウマチスくさい名ぢやないこと。

フイリップ　痛風石――チョークストーンズといふのかも知れない。

ドーリー　（肩越しに女中に向ひ）クランプストーンさんを御連れ申して下さい。

女　中　（ドーリーを直して）クランプトンさまでございます。（女中出る。）

ドーリー　（稽古をする樣に、幾度もくり返して）クランプトン、クランプトン、クランプトン、クランプトン。（わざと卓子に腰をかけ）わたし眞實の名を覺えなきやならない。さうでないとどんな呼び方をするか知れたものぢやないわ。

グローリヤ　フィル、おまへさん、あんな恐ろしい事を信ずる事が出來て。阿父さんの事で――いま阿母さんの云つた事を。

フイリップ　うむ、世間にやさう云つた人間も澤山あるさ。シヤミコ老爺は、いつも馬車の鞭で鼻や娘をなぐりつけて居たよ。

ドーリー　（さげすむ樣に）ほんたうに、あの葡萄牙人め！

フイリップ　さういふ無茶な奴になると、葡萄牙人でも、英吉利人でも大抵共通なものだよ、ドール。人情に關する僕の知識を信用するがいゝ。（兄さんぶつた、もつともらしい容子をして、煖爐の前の數物の上へもどる）。

グローリヤ　（口惜しさうに）もう二度と再びあんな馬鹿な事をするものか、阿父さんがどんな風な人だか考へて見ようなんて。ドーリー、おまへ悲しいと思つて、おまへの阿父さん――金をどつさりもつてる阿父さんの事を？

ドーリー　馬鹿々々しい！なんで汝さんの阿父さんの事なんか――ひとりぼつちでくよ〳〵胸を痛めてる憐れな老爺さん。屹度財産もなくなつてるわ。

フイリップ　兎に角阿父さんどの、時代後れな事だけは間違ひはないよ。（扉の外で、ヴアレンタインが誰かと話し合ふ聲聞える）。しつ、奴が來る。

グローリヤ　（心配さうに）誰が。

ドーリー　チヨークストーンズよ。

フイリップ　しつ！氣をつけ。（一同容子ぶる。フイルは小さな聲で、グローリヤに云ひ足す）晝餐に招んでもよい程の人間だつたら、僕はドーリーにうなづいて見せる。而してドーリーがおまへさんに

うなづいたら、直ぐに彼男を招待して下さい。

ヴアレンタインは大家さんと一緒に還つて來る。フアガス・クランプトン君は、背の高い、がつちりした、骨つぽい六十恰好の男で、馬鹿に强情で氣むづかしやらしい口を結んで、ぶつくさ〳〵獨斷的らしい聲を出す。それに皮膚が薄くつて透明つてるところと、指の細いところで判斷すると、餘程感情的で神經質らしい。此氣むづかしさと强情の爲めに、何事に對しても烈しく憎惡を感ずる人だといふ事は、その悲しさうな、とげ〳〵しい目付や憐つぽい聲の調子や、いかにも人づきの惡い容子や、生れつき不愛相な容子を力めて直さうと、始終氣にして居るのでも分るのだ。その鋭どい顏付によつて見ても、强情な人間な事は明かに分る。が、生活が不如意だとか、商賣上肩身の狹い容子なぞは毫も見えない。服裝もよいしするから、ざつと踏んでも、大商人の舊家から血統を引いた金持の大製造家にくり込む事が出來る。併しその海軍紺の上衣は、普通流行の型ではない。と云つて、水先案内の制服をそのまゝではないが、まあさう云つた裁ち方で、前は二重になつて大き

な釦と、廣い襟がついて居る。商賣人の店よりは、寧ろ造船所から出て來さうな衣服である。此男はヴアレンタインが大變に氣に入つてる。といふのは、ヴアレンタインは此男の氣むづかしさを何とも思はずに、ざつくばらんに交際つて居るからで、此男は心の中でそれを感謝して居るのだ。

ヴアレンタイン　御紹介致します――これがクランプトンさん――ドロシィー・クランドン嬢に、フィリップ・クランドン君、クランドン嬢。（クランプトンは氣まりが惡さうに立ながら挨拶する。一同も挨拶する。）おかけなさい、クランプトンさん。

ドーリー　（治療室を指して）之が一番かけ工合のいゝ椅子ですよ。

チョー――クランプトンさん。

クランプトン　有難う、だがこの御嬢さんが――（椅子の側に近いグローリヤに指す。）

グローリヤ　難有う、グランプトンさん。わたしどもはもう歸るところなのです。

ヴアレンタイン　（憎氣のない横柄面をして、椅子の方へ行かうとするグランプトンを推つけて）おかけなさい、おかけなさい。あなた草疲れてるでせう。

グランプトン　うむ、この中でわしは一番年をとつてるからね、わしは――（稍リウマチスらしく、治療臺に腰をかけて言を切る。この間にフイルは室を横つてあるきながら、批評的にグランプトンを研究して、ドーリーにうなづく、ドーリーはグローリヤにうなづく。）

グローリヤ　グランプトンさん。わたくしどもは、ヴアレンタインさんに御一緒に願はうと思ふんです。さうするとあなたと

御食事をなさる御邪魔をする事になりますが、あなたにも一緒に來ていたゞいたら、わたしの母は、嘸喜ぶだらうと存じますよ。

グランプトン　（しばらくじつとグローリヤを見詰めて居つたが嬉しさうに）難有う。是非うかゞひませう。

グローリヤ
ドーリー
フイリップ
小さな聲で丁寧に
どうも有難う――
うれしいわね――
全く愉快だ――
えゝ――
えゝ――
えゝ――

話は途切れる。グローリヤとドーリーとは互に顏を見合す。と、今度はヴアレンタインとフイルの顏を見る。ヴアレンタインとフイルとは度を失つて顏を眷向ける。而して又忽ち見合せる。何しろ二人はまた顏を見返してそれがらグローリヤとドーリーとの目と目を見あはせる程どぎまぎ

する。こんな風に一巡皆な見合せたが、さて何にも變つた事はないので、つかりへんてつもないと云つた姿になる。クランプトンは自分のまはりを見て、どんな事がはじまるかと待つて居る。みんな遣り切れないほど默り込む。

ドーリー　（突然話をはずませやうとして）あなたおいくつ、クランプトンさん。

グローリヤ　（急いで）ヴアレンタインさん、わたくしどもはもう行かなければなりませんわ。ぢやあ、ようございますか、一時半にお目にかゝるのですよ。（扉の方へ行かうとする。フイルも一緒に行く。ヴアレンタイン呼鐘の方へ引退る）。

ヴアレンタイン　一時半。（呼鐘をならす）。有難う。（グローリヤとフイルについて扉の方へ行き、三人一緒に外へ出る）。

ドーリー　（その間にそつとクランプトンの側へ忍び寄り）瓦斯をかけておもらひなさい。特別に二圓五十錢出すのですが、それだけの價値はありますよ。

クランプトン　（面白がつて）なる程。（一層じつとドーリーを見て）うむ、あなたはわしの年齢を知りたいと御云ひだつたね。わしは五十七になりますよ。

ドーリー　（承知して）さう見えるわ。

クランプトン　（鋭い顏をして）さう見えるかも知れないね。

ドーリー　何だつてそんな怖い顏をして、わたしを見るの。どうかしたの。（自分の帽子が變ではないかと觸つて見る）。

クランプトン　あなたに似て居る人がある。

ドーリー　だあれ？

クランプトン　うむ、あなたはわしの阿母の癖をそつくりだ。

ドーリー　（信じない風で）あなたの阿母さん!!あなた大丈夫、娘さんの事ぢやなくつて。

クランプトン　（突然氣もちを悪くして）いゝや、大丈夫、娘の事ぢやありません。

ドーリー　（同情して）齒がいけないの。

クランプトン　いや〳〵、齒はなんともない。昔の思ひ出が胸を痛めるのだ。お孃さん、齒ぢやあ有りませんよ。

ドーリー　抜いておしまひなさい。『思ひ出より、深く根ざせる悲しみを引抜け』瓦斯でもつて、特別に二圓五十錢出して。

クランプトン　（執拗に）いや、悲しみではありません。昔うけた手疵です。たゞそれだけの事です、わしは受けた手疵は決して忘れない。また忘れやうとも思ひません。（恐ろしい澁面をする）。

ドーリー　（クランプトンの顏をじつと見つめて）あなた、そんな古疵の事なんぞをくよ〳〵思つてるなら、わたしたちは忌になつてしまふことよ。

フイリップ　（そうつと部屋へ入つて來て、トーリーの後へ忍び寄り）妹は腹は惡くはないんですが、どうも無茶ですからね。さあ、ドーリー、出かけやう！（扉の方へドーリーをつれ出す）。

ドーリー　（聲を低めながら、はつきり聞える程に）あの人はね、たつた五十七にしきやならないつて。而してわたしはあの人の阿母さん

そのまゝだつて。而して――あの人は自分の娘が嫌ひなんだつて。而して――（ヴアレンタインが入つて來たので言がとぎれる。）

ヴアレンタイン　クランドン嬢は行つておしまひなさいましたよ。

フイリップ　一時半を忘れちやいけませんよ。

ドーリー　何か喰べられるだけの歯は、クランプトンさんに殘して置いて上げて下さい。（三人は立去る。ヴアレンタインは器械箪笥の側へ來て、それを開く）。

クランプトン　あれあ駄々つ子だ。ヴアレンタインさん。あれが近世的産物の一つだね、わしがあの位の年頃には、行儀作法を教へてもらふ爲めに、まだはつきり覺えてるほど、烈しくなぐりつけられたものだよ。

ヴアレンタイン　（口内鏡と探針とを箪笥の前の棚から取上げて）あの姉さんの方は如何思ひますね。

クランプトン　おまへさんは姉の方がすきなんだね、えゝ。

ヴアレンタイン　（情熱的に）あの婦人には、わたしはしつかり……（自分で止めたが、また平凡に言をつぐ）とにかく、これあ商賣外です。

（クランプトンの右の肩の後に立つて、今度は醫師さまらしい口調をつかふ。）

口を開いて下さい。（クランプトン口を開く。ヴアレンタイン鏡を入れる、而して歯を檢査する）うむ！これを毀しましたね。惜しいものだ、こんな見事な揃つた歯をいためるなんて！何だつてこんな歯で胡桃をわつたのです。（鏡を引つこまして、クランプトンと話をするために前へ出る。）

クランプトン　わしはいつでも歯で胡桃を割つてる。さうでもしなけりや歯があつつたて何の役に立つものか。（獨斷的に）歯をよくして置く名法は、どつさり骨や胡桃で使ひならして、それから毎日石鹸で洗ふ事だ――あたりまへの黄ろい石鹸で。

ヴアレンタイン　石鹸！何故石鹸で！。

クランプトン　わしは子供の時から使ひ初めたのさ、さうしろと云ふものだからね。わしはそれ以來つかつて居るが、生涯に一度も歯の痛かつた事はない。

ヴアレンタイン　でも少しきたないと思ひませんか。

クランプトン　わしに適ふものは、大抵汚ないものらしい。が、わしはそれを辛抱する樣に教へられたのだ。それを辛抱する樣に

育てられたのだ。今ぢやもう慣れ切つてる。全くいゝ石鹸の味と來た日には、實際たまらないよ。

ヴアレンタイン　（われにもあらず妙な顔をして）あなたは大變に注意ぶかい教育をお受けになつたと見えますね、クランプトンさん。

クランプトン　（鋭い顔をして）兎に角、わしは甘やかされはしなかつた。

ヴアレンタイン　（ひとりこつそり笑つて）たしかですかね。

クランプトン　それあまた如何いふ譯だね。

ヴアレンタイン　成程、あなたの歯はたしかに好い。が、道樂者の口の中にも、あなたに負けない程の好い歯があるのを見ましたよ。（器械算筒の櫛の櫛へ行つて、探針をとりかへる）。

クランプトン　あれあ歯に効能があるんぢやない、人格に効能があるんだ。

ヴアレンタイン　（おだやかに）。はゝあ、人格に！なるほど。（治療をはじめる）。尙少し口を開いて下さい。ふむ！こいつは抜いつちまはなけりやいけません。もう療治はとゞかない。（探針を引き抜いて、再び椅子の側へ寄て話をする）。驚く事はありません。何も感じやしません。瓦斯をかけて上げませう。

クランプトン　馬鹿なつ、君。瓦斯なんざあ御免を蒙るよ。さあ抜いてもらはう。わしの若い頃にあ、みんな退引ならない痛さは我慢をする樣に教はつたものだ。

ヴアレンタイン　うむ、痛くされるのが御好みなら、よろしい。御好み通りいくらでも痛くしてあげやう。あなたの人格にいゝ効能があつても、特別の料金は頂戴しません。

クランプトン　（立上つて、相手をじつと見る）若先生、君はわたしに六週間の家賃をかりてるぜ。

ヴアレンタイン　借りてます。

クランプトン　返せるかね。

ヴアレンタイン　返せません。

クランプトン　（自分が優勝者なのに滿足して）わしも返せまいと思つて居た。おまへさんも患者を馬鹿にするより外にうまい事が出來なかつた日には、いつわしの借財が返せると思つてるね。（再び腰をかける）。

ヴアレンタイン　大家さん、わたしの患者は洗濯石鹸でばかり、人格を拵へちやあ居ませんよ。

グランプトン　（再び器械算筍の方へ行かんとするヴアレンタインの腕を突然引っかみ）それは尙惡い！一體おまへさんはわしの人格を理解しちやあ居ない。わしはこんな齒がみんな無くなつてしまつてもいゝのなら、眞實に鍛へた人間といふものは、一旦決心した日には、どんな事でもやれるものだつて事を見せつけてやるために、一本づゝ引つこ拔いてもらふんだがな。（此宣言を強めるため、ヴアレンタインに點頭いて見せ、それから手を放す）。

ヴアレンタイン　（例の伸氣先生ちつとも驚かず）その以上もつと鍛へられやうと思つてるのですか、えゝ。

グランプトン　さうさ。

ヴアレンタイン　（呼鐘の方へゆつたり行つて）なる程、あなたはもう十分鍛へられてるから、わたしなんぞには冷酷過ぎる――大家さんとしてね。（グランプトンは癪にさはつた樣な呻き聲を出して之に對す。ヴアレンタインは呼鐘を鳴らし、その返事を待つ間陽氣な調子でしやべる。）あなたは何故結婚をしなかつたのです、グランプトンさん。妻子があればいくらかあなたの冷酷さを減す事が出來たらうと思ひますがね。

グランプトン　（餓かに恐ろしい容子になつて）大きなお世話だ。（女中戸口に現はる）。

ヴアレンタイン　（丁寧に）お湯をもつて來ておくれ。（女中退く。ヴア

レンタインはクランプトンの無禮を何とも思はず、器械簞笥の方へ戻り、はなしをつゞけながら、拔齒器をえらみ、張口器やコップと一緒に、手近に置く。）あなたは餘計なお世話だと云ひましたね。が、わたしは自分で結婚しやうと思つてるんですよ。

クランプトン　（皮肉にぶつくさいふ）　なある程、なある程。若い者が一文無しになつて、二十四時間内に大家から家財の差押へを喰はうといふ場合に、結婚をする。わしは前にも見た事がある、よからう、結婚なさい、而して貧乏するがいゝ。

ヴアレンタイン　くだらない！あなたにや、結婚の事なんか何が分るものですか。

クランプトン　わしあ、獨身者ぢやあないよ。

ヴアレンタイン　では、クランプトン夫人があるんですか。

クランプトン　（無念の情にたじろぎながら）うむ――憎い阿魔だ！

ヴアレンタイン　（澄して）　ふむ！ぢやあ夫でもあり、阿父さんでもあるのですね、クランプトンさん。

クランプトン　子供は三人。

ヴアレンタイン　（丁寧に）憎い餓鬼共ですかね――えゝ？

クランプトン　（嫉妬氣味で）いゝや。子供は女房とわしと二人のものだ。（女中湯の壺をもつて入つて來る）。

ヴアレンタイン　有難う。（女中から壺を取り、簞笥の傍へそれを運ぶ。矢張だらけた調子のまゝで）クランプトンさん、是非御家の方々とお知合になりたいものですね。（女中退場。ヴアレンタインは、コップへ湯

を注ぐ)。

クランプトン　殘念ながら御紹介が出來ない。有難いことには、わしは彼奴等が何處に居るかも知らなければ、氣をつけた事もない。彼奴等がとつかへ行つ了つてからは。(ヴアレンタインは眉と肩とを一ゆすり搖ぶつて、拔齒器をかちやんと湯のコップへ落す)。わしにつかふものなんぞ、溫めるには及ばないよ。冷たい鋼ぐらゐ驚きあしないからね。(ヴアレンタインは椅子の側に、瓦斯ポンプとシリンダアとを揃へやうとしやがむ)。その重いものは何だね。

ヴアレンタイン　なに心配にや及びません、わたしの足をかけるものなんです。齒をうまく拔くのに、力を入れるものがなければいけませんからね。(クランプトン、われにもあらず慌て出す。ヴアレンタインは眞直に立つて、コップと拔拔器とを揃へて手近に置き、あせつても如何もしてないといふ容子でしやべる。)そこで、あなたは結婚をしないやうに忠告して下すつたね。クランプトンさん。(椅子を上げ下げする仕掛の廻轉機をとりつけやうとしやがむ。)

クランプトン　(いろ〳〵して)　わしはおまへさんに忠告する、わしの齒を拔くだけにして、細君の事なんぞは云つてもらはない事にしてもらひたい。さあ、いゝかね、先生、(椅子の臂かけをつかみ、身構へする。)

ヴアレンタイン　(廻轉機に手をかけて、ちよつとクランプトンを見上げながらいふ)あなたがひとぐ感ずる樣に齒を拔いてあげたら、あなたは何を賭ますね。

クランプトン　六週間の家賃を賭ける。かごまかしちやいけないよ。

ヴアレンタイン　（賭に應じて、烈しく椅子を捲上げながら）よろしい。用意！（クランプトンは急に身體が上つたので、吃驚して、椅子から手を離し、兩手を組み、固くなつて眞直にかける。而して此上の離場に對する用意をする。ヴアレンタインは突然椅子の背を鈍角に傾げる）。

クランプトン　（引くりかへる拍子に椅子の臂がけにしがみつき）ど！氣をつけて下さい！全くやりきれない、こんな——

ヴアレンタイン　（敏捷に張口器でクランプトンをとめて、瓦斯器械の口金を引つかみながら）今にもつと遣りきれなくなりますよ。（クランプトンの口と鼻に口金をおしつけ、自分の胸でクランプトンの頭と肩とを、しつかりと

椅子に推つける。クランプトンは口金の中から不明瞭な音を出し、ヴアレンタインが自分の前に居るかと思つて、手をかけやうとする。しばらくしてその兩手は目的なしに搖いだが、やがて力なく下つてしまふ。クランプトンはもう感覺を失つたのだ。ヴアレンタインはわれにもあらず勝利の聲を擧げて、そいで口金を側へ投出し、素逸くコップから拔齒器をとり出す。それから——幕が下る）。

第二幕

マリーヌ・ホテルの高臺の上。そこは太陽のギラ〳〵照つて居る、四角な石を敷きつめた高臺で、海際のところは廣い笠石の載つかつてる大きな油壺形の柱の手摺で劃られて居る。ホテルの給仕人は頭は海へ背を向けて晝餐の卓子へナプキンを置いて居る。此男の右手がホテルで、左手の一番海に近い角には海邊へ下る階段がある。此男が自分の前の高臺を見下すと、一寸左へ寄つて、中年の紳士が鐵骨の椅子に腰をかけ、蜂が三匹とまつてる、角砂糖の容器の置いてある小さな鐵製の卓子に對して、スタンダード新聞を讀んで居る。而して頃しも八月、正午過ぎの一時間足らずも、この差出してる足の甲を燒きつけて居る太陽の光を防がうといふので、傘をさして居る。丁度此人の向ふ側、ホテルの高臺へ寄つた方に、普通の遊歩場にありさうな形の庭椅子がある。お客がホテルへ入るには、正面の眞中にある入口を通るので、そこへは一段高くなつた、廣い四角な敷石から、階段を二つ上つ

て行くのだ。手摺にもつと近いところには、小さな格子の玄關のついて居る、臺處への道が隱見して居る。給仕人が仕事をして居る卓子は、長いもので高臺に横つて居る。其上には帛がかけてあつて、椅子が五脚、二つづゝ向ひあつて、一つはホテルに近い横の方に置いてある。手摺に向つて卓子が一つ又別に置いてあるが、之は給仕の臺として準備してあるのだ。

此給仕人は此男固有の特色のある人間だ。白髮で、纖細な容子の、肌ざはりの好ささうな老人で、其辮如何にもにこ〳〵して不足のなささうな風なので、此男の元氣な前へ出ると、野心は卑俗なもので、空想といふものは豐富で興味ある現實の敵だといふので、叱りつけられてる樣な氣がする。それに此男はその職業に秀でゝ居る人間や、成功の徒爾なる事を知つて居ると同時に嫉妬心などにはちつとも影響されない人間に特有な或一種の表情をもつて居る。

鐵の卓子に對して居る紳士は、海邊に相應な服裝をして居ない。彼は倫敦風のフロックコートを着て、手袋をはめて居る。而してその高いシルクハ

ットは卓子の砂糖の容器の脇に置いてある　その着物の立派な手置なり、地質なり、それでスタンダアドを讀んで居る金縁の鼻眼鏡なり、さてはその手許の地方新聞の上に重れてあるタイムス新聞なりが、すべて此人の身分のある事を證明する。年はかれこれ五十歳、無髯で五分刈で、わざとへの字口にして居る容子は、丁度此人が口の雨隅が上へ向きたがつてるのを見て、彼等の自由にはしてやらないと決心でもしたらしく見える。耳は馬鹿に大きく、眼は鱈色をして居る。而してその額は思ひ切つて廣く開いて居るが、これも其青年時代に、正直で、大度で、清廉であらうと決心したが、その心は始終自動的に、無意義に活動する樣にはうまくいかなかつたといふ樣に見える。兎に角この人は如何したつて、他に安く扱はれる樣な人間ではない。此人には間抜らしい容子や、意志の薄弱などゝいつた容子は少しもない。それどころか、この人は、何處へ行つても、誰が見ても、普通の高等職業の人が有する資格や地位よりは、たしかに以上なものを有して居る人物として受取られるに相違ない。この人は今日の天氣と海の景色とがひどく氣に入

つて、更に待遠しい容子はない。併し彼は新聞の記事を殘らず讀み盡してしまつて、とう〳〵廣告にまで及んだが、さすがにこの欄だけは彼を辛抱させるほどの十分な力はなかつた。

紳士　（欠伸してさてつまらない樣に、新聞を棄てゝ）給仕人！

給仕人　へえ（側へ來る）。

紳士　確かゝえ、クランドンの奥樣が晝餐前に還つていらしやるといふのは。

給仕人　確かでございます、へえ。あなたが一時十五分には入らつしやるだらうつて、心待にまつて居らつしやいましたよ、へえ。

（紳士は忽ちに給仕人の聲に慰められて、だるさうな笑ひ方をして給仕人を見る。此給仕人の聲は靜かでおだやかな旋律があつて、極つまらない事を云つても、自づから同情がおこる。そしてその話し方が如何にもやさしく折目正

しい、而して倫敦の下等社會の樣にエーチといふ發音をおとしたり、妙な處へつかつたりする事もなく、其外これと云つて野鄙な事は云はない。彼は話しながら懷中時計を見る)。まだ左樣はなりません、へえ。十二時四十三分でございます、へえ。たつたもう二分間御待になればよろしいので、へえ。上天氣でございますな、へえ。

紳士　うむ、倫敦よりはずつと氣持がいゝ。

給仕人　へえ、左樣でございますよ。皆樣が左樣仰有います、へえ。時に全くいゝ御方々でございますな、グランドンの奥樣の御一家は、へえ。

紳士　おまへは、あの連中が好きかな。

給仕人　えゝ〳〵。あの方々はそれあざつくばらんでいらつしやいましてな、全く愛嬌のある方々でございますよ、へえ。實際全く愛嬌のある方々でございますよ。わけてあの若い嬢さまと若旦那さまがな。

紳士　ドロテアさんに、フイリツプさんの事かな。

給仕人　左樣でございますよ、へえ。若い嬢さまが、御用を仰有つるか何かなさいます時にはな、かう仰有るのでございますよ、『お忘れでないよ、ウキリアム、わたしたちは汝のために此ホテルへ來たんだよ、汝は申分のない給仕人だつてことを聞いたものだから』つてな。それから若旦那さまは、こんなことを手前に仰有るのでございますよ。手前を御覽になると、ひどく阿父さまをお思ひ出しになりますつて(紳士はぎよつとする)。それでわたし

も阿父さまに扱はれる樣にしてもらひたいなんてな。（嬉しさうな晴やかな調子で）えゝ、全く御元氣な、へえ、全やおやさしい、ほんたうに御元氣な方でございますよ。

紳士　おまへがあの人の阿父さんに似て居る！（馬鹿々々しくなって笑ひ出す。）

給仕人　なあに、あなた、あの方々の仰有る事を眞面目にとつてはいけません。へえ、無論、それが眞實でございましたら、若い孃さんも似て居るとお氣がつく筈でございます、へえ。

紳士　氣がついたかな。

給仕人　如何致しまして、へえ。あの方は手前を、ストラットフォードのお寺にございます沙翁の肖像の樣だと思召して居らつ

しやいます。それで手前をウキリアムと御呼びになるのでございます、へえ。手前のほんたうの名はな、ウオルタアでございますよ、へえ。（卓子の方へ戻らうとしてふり向くと、階段を踏んで海邊から高臺の方へ上つて來るクランドン夫人が目に入る）やつ、クランドンの奥樣がいらつしやいます、へえ。（控へ目に内緒らしい調子で）奥樣、お客さまが。

クランドン夫人　もうお二人紳士のかたが晝餐にいらつしやるよ、ウキリアム。

給仕人　畏まりました、奥樣。有難うございます。奥樣。（ポテルを退く。クランドン夫人は來客は何處に居るかと見廻しながら前へ進んだが、その人とは分らぬ容子で行過ぎてしまふ）。

紳士　（傘の下から不思議さうに夫人をのぞき込んで）私がお分りになりませんか。

クランドン夫人　（信じられぬ樣にじつと紳士を見て）あなたは、フインチ・マツコーマスさんですか。

マツコーマス　お分りになりませんか。（傘をすぼめてそれを側へ置き滑稽らしく直立して、臂に手をあて顏を見せる樣にする）。

クランドン夫人　成程あなたらしい（紳士に手を出す。握手の工合で、舊友が長年逢はなかつた事が分る）。髯はどうしました。

マツコーマス　（冗談らしく眞面目に）あなたは髯のある辯護士をたのまうと思つて居らつしやるのですが。

クランドン夫人　（卓子のうへのシルクハットに指して）それはあなたの帽子？

マツコーマス　あなたは鍔の廣い帽子をかぶつてゐる辯護士をたのまうと思つて居らつしやるのですか。

クランドン夫人　わたしはね、この十八年といふもの、あなたは矢張髯があつて、鍔の廣い帽子を被つて居らつしやると思つて居ましたの。（庭椅子へかける。マツコーマスは再び自分の椅子にかける）。あなたはまだ方言研究會の集會へお出かけになりますか。

マツコーマス　（眞面目に）此頃はあんまり行きません。

クランドン夫人　フインチさん。それで分りましたよ。あなたは上品におなんなすつた事ね。

マツコーマス　あなたは如何ですか。

クランドン夫人　ちつとも。

マッコーマス　まだ昔の議論を主張して居らつしやるのですかな。

クランドン夫人　何處までもしつかりと。

マッコーマス　驚きましたな！　で、あなたはまだ公衆の中で演說をしやうとしてゐらつしやるのですかね。女性の癖に（クランドン夫人は首肯く）。結婚した婦人でも、自分の財產を別に所有する權利のあるといふことを主張したり（夫人はまた首肯く）。ダーウキンの生物の原始の意見や、ジョン・スチユアルト・ミルの自由論のために論戰をやつたり（うなづく）。ハックスレーや、チンダルや、ジョーヂ・エリオットを讀んだり。（三たびうなづく）。而して男と同じ樣に婦人にも大學の學位や、高等職業の開始や、議會の參

政權を要求したりしようとして居らつしやるのですね。

クランドン夫人　（決然として）左樣ですよ。わたしは一寸だつて後へは退きませんでした。而してわたしは、自分の事業を繼がせる樣に、グローリヤを敎育しました。わたしを英國へ歸らせたのはその爲めなのです。わたしは彼女をマディラ――わたしのセント・ヘレナへ生埋にして置く權利はないと考へたのです、フインチさん。彼女もわたしがやられた樣に、屹度世間から吼えつかれるだらうと思ひますが、なあに、あれはもう其れに對する準備をして居るのです。

マッコーマス　吼えつかれる！　えゝ奧さん。あの方を大僧正のところへお嫁におやりになるにしても、今日ではもうその位の意見

なんぞはちつとも邪魔にはなりはしません。あなたは丁度今わたしを上品になつたと云つて攻撃なすつた。が、それはあなたが間違つて居らつしやる。わたしは依然として昔の説を堅く執つて居る。わたしは寺へは行かん、またわたしは行く樣な風もしない。わたしは自分の立場を明白にして居る。わたしは自分の先生のハアバアト・スペンサアから學んだ通り、個人の自由と權利を主張して居る哲學的急進派だ。それなら、わたしは世間から吼えつかれて居るかといふと、左樣でない。わたしは時勢後れの老人として閑却される。わたしは社會主義に膝を屈しないものだから、何事からも疎外されて居る。

クランドン夫人　（ギヨッとして）　社會主義！

マッコーマス　左樣、社會主義です。若しあなたがグローリアさんを此邊におつ離して置きなさらうものなら、此月の末までには、それが屹度あのお嬢さんの耳にも入りますよ。

クランドン夫人　（語に力を入れて）でも、わたしは社會主義は謬見だといふ事を、あれに證據立てゝ見せる事が出來ます。

マッコーマス　（嘲れらしく）　クランドンの奥さん、わたしが若い弟子を殘らず失してしまつたのは、やつぱりそれを證據立てたゝめなのです。だから御自分の事だけを氣をつけて、あのお嬢さんは彼の方の好きな樣にさせておやんなさい。（少し澁面づくつて）わたしどもはもう舊式だ。世間はわれ〳〵をもう打捨つたと思つてるんです。が、英國中にたゞ一ヶ所、あなたの説がまだ進

歩したものとして通るところがあります。

クランドン夫人　（驚んた樣に鼻の先で）お寺でせう？

マツコーマス　いゝや、劇場です。ところで職業にとりかゝりませう！あなたは何故わたしをこゝへ御呼びになつたのです。

クランドン夫人　えゝ、あなたに御目にかゝりたいと思つたのが一つ——

マツコーマス　（憎氣のない皮肉な調子で）有難う。

クランドン夫人　それからも一つは子供たちへあなたから何もかも云つてきかしていたゞきたいと思ひまして。彼子たちは何にも知りませんがね。しかしかうやつて英國へ歸つて來た以上は、もうあの子たちにも知らせずに置くわけには行きません

からね。（心配さうに）フインチさん。わたしは自分ではとても彼子たちに聞かせてやる譯にはいきません。わたし——（ところへ双生兒と、グローリヤが入つて來たので話がとぎれる。ドーリーはフイルと競走しながら、階段を駈上つて來る。フイルは恐ろしい速力と悠々迫らない容子とを一時に示して居るが其爲めに競走に負けてしまつて、ドーリーは先に阿母の側へ行つたが、餘り狼狽を喰つてかけつけたので、庭椅子をひつくり返しかける）。

ドーリー　（呼吸をきつて）大丈夫よ、阿母さん。歯科醫は來るの、そしてあの老爺さんを連れて來るの。

クランドン夫人　ドーリーや、おまへ、マツコーマスさんが分らなくなつて。

ドーリー　（如何にも驚んだ樣な、見るからに失望した顏付で）この人が！ふさ〳〵した毛髮はどこへ行つて。

フィリップ　（おだやかにドーリーの後押をして）髯はどこへ行つて？——上着は！——詩人的風采は？

ドーリー　あゝ、マッコーマスさん、あなた餘計な事をして、わざつと容子を惡くしてしまつたのね。何故わたしたちに逢ふまで待つて居なかつたの。

マッコーマス　（吃驚したが、忽ち氣を取直してこの不意の襲擊にあたらんとする）十八年間髮を刈らずに居るのは、辯護士にだつて餘り長過ぎますからね。

グローリヤ　（マッコーマスの向側から）御機嫌はいかゞ、マッコーマス

さん。（マッコーマス振向く。と、グローリヤは彼の手をとつて、かたく握り不遠慮に向ふの目を見る）。とう〳〵お目にかゝれましたね。

マッコーマス　グローリヤさんですね。（グローリーヤ笑ひながら首肯きまた振り返して、マッコーマスの手を放す。而して庭椅子の所へ行き、グランドン夫人の側の椅子の背へよりかゝる）。而してこの若い紳士は。

フィリップ　僕は比較的平凡な命名をされたのです。僕の名は——

ドーリー　（フィリップの代りに聲色めかして喋舌る）『ノーヴァルと申すもの。グランピヤの邸の上にて』——

フィリップ　（眞面目に奎詞めかして）『わが父は羊を飼ふ。節儉なる田舍者のわが父は』——

グランドン夫人（戒めるやうに）これ、これ、おまへたち。馬鹿も大概に

おしなさい。フィンチさん、この子たちには、この邊のものが何でも新しく思へるんで、たゞもう夢中なんです。この子たちは逢ふ英國人も〳〵みんな茶化してしまふんです。

ドーリー　えゝ、向ふが左樣なんですわ、わたしたちが惡いんぢやありませんわ。

フィリップ　人情に關する僕の智識は可成廣いんです、マッコーマス。が、此島の住民を眞面目に扱ふのは難かしい事だと思ひますよ。

マッコーマス　あゝ、あなたはフィリップ坊ちやんでせう。（手を出す）

フィリップ（マッコーマスの手を取って、眞面目に彼を見入り）僕はフィリップ坊ちやんでした――長い事左樣でした。丁度あなたも一度はフィンチ坊ちやんだつた樣に。（一度手を握つたのみで直ぐ放してしまふ。と、後を向いて立去りさま思ひ入つて叫び出す）。自分の子供の時の事をふり返つて見ると妙な氣がしますね。（マッコーマスはじつと彼を見送つたが、まるで元氣がない）。

ドーリー（グランドン夫人に）フィンチさんに御酒をあげて。

グランドン夫人（推し止めて）まあ、おまへ、マッコーマスさんはね、わたしたちと一緒に食事をなさるのだよ。

ドーリー　ぢやあ七人前注文して。あの老爺さんを忘れちやいけないことよ。

グランドン夫人　忘れはしないよ。何とかいふ名だつたね。

ドーリー　チョークストーンズ。あの人は一時半にこゝへ來ますよ。（マッコーマスに）わたしたちはあなたの想つて居た通りなの。

クランドン夫人　（少し權柄づくな程熱心に）ドーリー。マッコーマスさんは、おまへ方にもつと眞面目な事を話さうとして居らつしやるんだよ。この方はね、おまへ方の阿父さんにもわたしにも友人なんです。而してこの方は、わたしよりはずつと明白と、わたしの結婚して居た頃の事をおまへ方に話して下さるんだよ。

グローリヤ、おまへそれでいゝかね。

グローリヤ　（眞面目に耳を立てゝ）マッコーマスさんは親切ですわね。

マッコーマス　（まご〳〵して）如何致しまして。何にしても餘り突然で、私は準備をしてないのです――えゝ――

ドーリー　（變に思つて）あら、何も準備なんぞいらないぢやありませんか。

フイリップ　（おだて込んで）眞實の事を話して下さい。

ドーリー　（語勢に力を入れて）禿頭見たやうに露骨にね。

マッコーマス　（苛々して）わたしが申上げやうと思ふ事は、眞面目にとつていたゞきたいと思ひますが。

フイリップ（馬鹿に重々しく）眞面目に取る價値のある事を望みますね。マッコーマスさん。僕の人情の智識は、何事もあまり大きな希望をもつものではないと、僕に敎へてくれましたよ。

クランドン夫人　（戒める樣に）フィル――

フイリップ　えゝ、阿母さん、大丈夫ですよ。どうも失禮しました、マッコーマスさん。氣にかけないで下さい。

ドーリー　（和める樣に）わたしたちは惡い氣はないのよ。

フイリップ　黙れえ、おい。

ドーリー　口をつぐむ。マッコーマスは食卓の椅子を取りこれを小さい卓子と、庭椅子との間へ置く。と、丁度右にはドーリー、左にはフイルが居る。彼れはこれから長い話をはじめやうといふ人の體裁を作つて、その椅子に身を下す。クランドン一家は、片唾をのんで彼れを打戍る。

マッコーマス　えへん！あなた方の阿父さんは——

ドーリー　いくつなの？

フイリップ　しつ！

クランドン夫人（やさしく）ドーリーや。マッコーマスさんの邪魔をしてはいけませんよ。

マッコーマス（力を入れて）有難う、クランドンの奥様。有難う。（ドーリーに）阿父さんは五十七です。

ドーリー（驚き、亢奮して飛上る）五十七!!どこに住んでるの。

クランドン夫人（戒めて）ドーリー、ドーリー！

マッコーマス（夫人をとめて）お答します、クランドンの奥様。この答へは手ひどくあなた方を吃驚させるでせう。あの人は此町に住んで居ます。（クランドン夫人は恐ろしく憤然として立上つたが、默然として又腰を下す。グローリヤは變に思つて母を見戍る。）

ドーリー（萬事承知といふ風で）わたし知つてるわ。フィル、チョークストーンズがわたしたちの阿父さんだわ！

マッコーマス　チョークストーンズ！

ドーリー　あゝ、グランプストーンズ、とが何とかいふのよ。あの人はさう云つてよ、わたしが彼人の阿母さんに似てるつて。左様

だわ、あの人は自分の娘の事を云つてたのだわ。

フイリップ　（極真面目に）マッコーマスさん。あなたのお考へは、如何やうにも御尊敬いたしたいと思ひますが、併し一つあなたに申上げて置きたい事があります。それはね、若しあなたが此町のクランプトン君が僕の父だといふ樣な事を云つて、飽くまで兩者の暗合を強ひやうとなさるなら、僕たちは暫時その御報告を伺ふことを御斷りしなければなりません。

マッコーマス　それあ如何いふわけで。

フイリップ　僕は其紳士に逢つたからです。而してあの人は僕の父なり、或ひはドーリーの父たり、或ひはグローリヤの父たり、或ひは僕の母の夫たるに、全然不適當な人です。

マッコーマス　なる程、如何にも！、それにしてもわたしは如斯いふ事を申上げたい、あなたはそれを御好みにならうとなるまいと、彼人はあなたの阿父さんであり、ドーリーさんの阿父さんであり、姉さんの阿父さんであり、又クランドン夫人の良人であるといふ事を。そこで！あなたはそれに就いて、如何いふことを仰有らうといふんです。

ドーリー　（すゝり泣きして）そんなに怒らなくたつていゝわ。クランプトンはあなたの阿父さんぢやないことよ。

フイリップ　マッコーマスさん。あなたのやり方は冷酷です。あなたも御覽の通り、一家のものはいひ知れぬ平和と、孤子としての自由を享樂して居るのです。僕たちは親戚の顏なんてものを

見た事はありません――自由意思で選擇した友人の外には、何等權利を要求された事はありません。ところで今あなたは僕たちの知りもしない人間を、僕たちの最も深い親戚關係として押付けやうとして居られる――

ドーリー　（熱心に）いやあな老爺さんよ！（癪にさはつたらしく）そしてあなたは、わたしたちの爲めに大變にいゝ阿父さんでもとつて置いたやうに話し出したのね！

マッコーマス　（怒つて）あの人がいゝ阿父さんでないといふ事が、如何して分りました。それに自分の阿父さんを選擇しやうなんて、あなたはどんな權利をもつて居るんです。（聲をあらゝげて）わたしは如斯申上げたい、お嬢さん、あなたはまだ若過る――

ドーリー　（突然に熱心にその語を遮ぎつて）待つて頂戴、わたし忘れて居たわ！あの人は金を持つてゝ。

マッコーマス　金はうんともつて居ます。

ドーリー　（喜んで）あゝ、わたし、平常どんな事を云つて居たと思つて、フィル。

フィリップ　ドーリー。僕たちは餘り輕卒にあの老爺さんを攻擊して居たやうだ。マッコーマスさん、それから。

マッコーマス　もう止しませう。わたしはひどく心地が惡い、ひどく驚いた、此以上御話は出來ない。

グランドン夫人　（無理に氣を靜めて）フインチさん。どんな事が起りかけてるのか、あなたには分りますまいがね、うちの子供たちは、

その人を晝飯に招待したので、その人はもう直にこゝへやつて來やうといふのですよ。

マツコーマス　（すつかり狼狽をくつて）何ですつて？あなたはその——私がそれを知つてるかつて——そのそれを——

フイリップ　（手強く）しつかりなさい、フィンチさん。しづかに、落ついて考へて下さい。その人は來るのです——食事に來るのです。

グローリヤ　わたしどもの中で、誰があの人に事情を打明けたものでせう。あなた考へて見て下すつて。

グランドン夫人　フィンチさん、あなたが話して下さらなけりや。

ドーリー　あゝ、フィンチさんはだめよ、人にものを打明るには。わたしに打明けやうとした不手際さ加減てなかつたわ。

マツコーマス　しやべつちやいかんと云ふ事ですから、それは御免を蒙りませう、

ドーリー　（おだてる樣にマツコーマスの腕をつかまへて）フィンチさんてば、怒つちやいやよ。

グランドン夫人　グローリヤ、あつちへ行きませう。もう直に來るだらうから。

グローリヤ　（誇視に）動かない方がようございます。阿母さん。わたしは動きません。わたしたちは逃出したりなんかしてはいけません。

グランドン夫人　（グローリヤを叱つて）まあ、わたしはこのまゝで食事の席へつく事は出來ません。又こゝへ來る事にしませう。空

威張なんかしない方がいゝ。（ゲローリヤはたじろいたが、無言でホテルの方へ行く。）さあおいで、ドーリー。（夫人がホテルの入口へ行くと、例の給仕人は追注文の二人前に必要な、皿や其他のものをのせた盆をもつてやつて來る。）

給仕人　奥さまお客樣はまだ入らつしやいませんか。

クランドン夫人　もう二人來る人があるの。どうぞ頼んだよ。直にこゝへ來るんだから。（ホテルへ入る。給仕人は給仕の卓子へ皿を置く。）

フイリップ　僕あうまい事を考へた。マッコーマスさん。此話は非常に懸引のうまい人に、やつてもらはなけりやいけますまい、ねえ。

マッコーマス　懸引を要しますね、たしかに。

フイリップ　よろしい！ドーリー。おまへはつひ今朝、だれかゞ懸引のうまかつたのに氣がつかなかつたかね。

ドーリー　（考へがついたので大喜び）あゝ眞實だわ！ウォリアムでせう！

フイリップ　その通り！ウォリアム！（と呼ぶ。）

給仕人　へえ、只今。

マッコーマス　（吃驚して）給仕人を！お待ちなさい、お待ちなさい！それあいけません。わたしは——

給仕人　（フイルとマッコーマスとの間へ身體を現はして）へえ、へえ。（マッコーマスの顏色は、蒼褪めて石のやうな灰色になる、而して其目は動きもしなければ色もなくなり、彼はたゞ茫然として腰をかける）。

フイリップ　僕をおまへの伴と思つて呉れと頼んだ事を、おまへは忘れやしまいね。

給仕人　（上品な、その癖ものに頓着しない容子で）へえ、へえ。諸事あなたの御思召次第で、へえ。

フイリップ　ウヰリアム、ところがおまへに阿父さんになつてもらはうと思つた初つぱなから、もう競争者が飛出したよ。

給仕人　あなたの眞實の阿父さんが、へえ。なる程、遲かれはやかれ、左樣ありさうな事ぢやございませんかね、へえ。（にこやかにマッコーマスの方へ振向いて）あなたが阿父さまでいらつしやいますか。

マッコーマス　（苦々しさうにまたまご〳〵して）さうぢやあない。わしの子供たちは、行儀作法をこゝろへて居る。

フイリップ　左樣ぢやないとも、ウヰリアム。もつとも此人は危なく阿父さんになりかけたがね。阿母さんを口説いたんだ、口説いてもだめだつたがね。

マッコーマス　（憤然として）一體、何が――

フイリップ　しつ！そのために此人は、たゞ自家の頼みつけの辯護士に過ぎなくなつたのさ。汝、クランプトンといふ人を知つてるか、此町の？

給仕人　藪睨みのクランプトンぢやございませんか、曲り菱の。

フイリップ　それは知らないがね。フィンチさん。その人は酒屋をやつて居るんですか。

マッコーマス　（癪にさはつて立上り）いや、いや、いや。あなた方の阿父

さんは、有名な快船の製造家で、この土地では聞えた人です。

給仕人　（すっかり分って）あゝどうも御免下さいまし。クランプトン様の御宅の御子息で居らつしやいますか。それは如何も——

フイリップ　クランプトンさんは、僕たちと食事に來るんだよ。

給仕人　（分らなくなって）へえ成程。（外交的に）あの方はあまり御宅の方とは、食事をなさいません様でございますね、へえ。

フイリップ　（力を入れて）ウキリアム、あの人は僕たちがあの人の一家のものだといふ事は知らないんだよ。十八年といふもの逢つた事はないんだからな。屹度僕たちを知らないだらう。（此話に力を込める様に、フイルは一飛びに鐵の椅子に腰をかけて、給仕人を見る、唇を結んで、足をぶら〳〵搖かして）。

ドーリー　わたしたちはね、おまへに此話をあの人に打明けてもらひたいの、ウキリアム。

給仕人　併しその方が阿母さまにお逢ひになりましたら、直ぐ御分りになるだらうと存じますが、お嬢さま。（フイルの足は動かなくなつて、茫然として給仕人を打戍る。）

ドーリー　（吃驚して）わたしまるでそれに氣がつかなかつたわ。

フイリ　僕も氣がつかなかつた。（卓子から離れて、叱りつける様にマツコーマスの方を向く）あなたも氣がつかなかつたのだね。

ドーリー　その癖あなたは辯護士ね！

フイリップ　フィンチさん、あなたの職業に無能な事は驚くべしですね。ウキリアム、おまへの智者なのには、一同顏色なしだ。

ドーリー　おまへはほんとうに沙翁の様だよ、ウォリアム。

給仕人　どう致しまして、あなた。恐れ入ります、お嬢さま。有難い仕合せで、へえ。（きまりわるさうに食卓の方へ行き、追注文の二人前の食器をならべる。一つは階段のそばの椅子の横手で、一つは手摺から一番離れて居る側の三番目になるやうに並べる。）

フィリップ（だしぬけにマッコーマスの腕をつかみ、ホテルの方へつれて行って）フィンチさん。さあ行つて、手を洗つて下さい。

マッコーマス　わしはまるで變になつて來て、心地がわるくなつてしまつた。グランドンさんは——

フィリップ（口を出して）僕たちには今に慣つこになりますよ。ドーリー、行かう。（マッコースは手をふり放ち、ホテルの方へすゝむ。フィルは落着いた風であとからつゞく。）

ドーリー（あとから續かうとして、ちよつと階段の方を振返り）どうぞしつかりして居ておくれ、ウォリアム。今に大騒ぎがはじまるだらうから。

給仕人　大丈夫でございます、お嬢さま。安心して居らつしやい。

（ドーリーはホテルへ行く。）

ヴァレンタインは氣輕に海邊から階段を上つて來る。クランプトンはむづかしい顔をしてあとからつゞく。ヴァレンタインは杖をもつて居る。クランプトンは年をとつて、肌寒い所爲か、それとも流行後れの水兵服を見せまいとする了見からか、薄外套を着て居る。彼はマッコーマスが高臺の眞中へ置いて行つた椅子の前で止り、その椅子の背へ手をかけて、しばらく身體を伸す。

クランプトン　あの階段のおかげで目が廻つた。（額を手でなでる）あの瓦斯の畜生がまだこびりついてやがる。

クランプトンは鐵の椅子の側へ行く。かうすると、そこへかけて肘を小さい椅子につき、頭を支へる事が出來るからである。彼は直に元氣を回復して外套の釦をはづしはじめる。その間にヴアレンタインは、給仕人と話をする。

ヴアレンタイン　給仕人！

給仕人　（二人の間へすゝんで來て）へえ、へえ。

ヴアレンタイン　ランフレー・クランドン夫人は。

給仕人　（やさしい笑ひ方をして歡迎する）へえ、へえ。お待ち申してお居でゝございましたよ。これがあなた方の卓子でございます、へえ。クランドンの奥樣は、直にいらつしやるでございませう、へえ。お嬢樣に若旦那は、丁度あなたのお連れさまの事を、御噂ですつていらしつた處でございましたよ、へえ。

ヴアレンタイン　成程！

給仕人　（輕く調子よく）ほんたうでございますよ。大層な御元氣で、へえ。陽氣の源とでも申しませうか、へえ。（外套をぬがうとして立上つたクランプトンの方へいそいで行く）御免下さいまし、へえ失禮ではございますが（外套を手傳つてぬがせ、それを受取る）。へえ、恐れ入ります。（クランプトン又腰をかける。給仕人はまたもとの調子になる）。若旦那の一番新しい御冗談は、あなたを阿父さんになさらうと云ふのでございますよ、へえ。

クランプトン　えつ？

給仕人　ほんの御冗談で、へえ、あのかたの十八番の御冗談で。昨日は手前が阿父さまになるところでございました。ところが今

日はあなたの入らつしやる事が分るか分らないに、あなたが若旦那の阿父さま――久しく分らなかつた阿父さまだと云つて、手前を欺さうとなさるのでございます。あなたには十八年も御目にかゝらないなぞと仰有つてな。

クランプトン　（吃驚して）十八年も！

給仕人　左様でございますよ、へえ。（ちよいと人の悪さうな容子で）併し手前にはあの方の悪戯は、もう分つて居りますのでな。へえ。丁度そこに立つて居らつしやいましてね、手前に、どんな新しい悪戯をしてやつた者かとかう考へて居らつしやいましたがな、やがてその考へが御つむりに浮んで參つたのが、手前にも見えたんでございます。えゝ、あの方は左様いふ方なんでございます

すよ。ごく御元氣な、ごーく出たらめで、全く愛相のおよろしい、へえ。（ヴアレンタインに話さうと、また間を變へた。ヴアレンタインは庭樗子の隅へ杖を立かけて居る）失禮ではございますが（ヴアレンタインの杖を取る）恐れ入ります、へえ。（ヴアレンタインは食卓の方へぶらぶらつて、獻立書を見る。給仕人はクランプトンの方へ向いて、話をつゞける）辯護士さんへ冗談の仲間入をなさるんでございますよ。その癖辯護士さんは、手前が若旦那の事を承知致して居るのは、御胸にもつて御話なすつて居らつしやる御樣子でございました。えゝ、全くでございますよ。あなた方には迚も思ひつきもなさいますまいが、倫敦から遊びにゐらつしやる立派なお客樣がたも、海の風にお吹かれになりますと、それは妙な事をなさいますよ、

へえ。

クランプトン　えゝ、辯護士が一緒に居る？

給仕人　お頼みつけの辯護士でございますよ、へえ。左樣でございますよ。マツコーマスといふお名前の方で、へえ。（外套と杖とを持つて、ホテルの入口の方へ行きかゝる。仕合せと其名が爆裂彈のやうな結果を、クランプトンの上に起したといふ事はすこしも知らずに）。

クランプトン　（腹も立ち、びつくりもして立上る）マツコーマスだ！（ヴアレンタインに呼かけて）ウァレンタイン！（又烈しく）ヴァレンタイン!!（ヴアレンタインふり向く。）これあ詐欺だ、だまし打ちだ！おれの家族だ——おれの子供どもだ——女房の畜生だ。

ヴアレンタイン　（冷淡に）うむ、成程！面白い會見ですね！（また獻立

書の研究をはじめる。）

クランプトン　會見だ！おれはしない。おれは御免蒙る。（給仕人を呼止めて）おい、その外套をくれ。

給仕人　へえ、へえ。（歸つて來て、ヴアレンタインの杖を氣をつけて食卓に立てかける。而して手際好く外套をふるつて、クランプトンに着せやうとそれを擴げる）あの手前が若旦那に何ぞ疏忽でも致したのでございませうか。

クランプトン　くそつ！（袖へ手をつゝこまうとして止める、而して餓かに思ひあたつたやうに、ヴアレンタインへ振向く）ヴァレンタイン君、君も一緒だね。君が此芝居をかいたんだらう。君が——

ヴアレンタイン　（斷乎として）馬鹿なつ！（獻立書を投出し、卓子をまはつて、無

頓着な容子をして手摺から向うを見に行く。）

クランプトン　（憤然として）君は何を――（マッコーマスにつゞいて、フィルとドーリーとが入つて來る。マッコーマスはクランプトンを見て、ちよつと尻込みする。）

給仕人　（物柔かにクランプトンの言を遮つて）しつかりなさいまし、あなた。皆様がおいでになりました。（ヴァレンタインの杖を取上げ、腕に外套を投かけて、ホテルの方へ行かうとする。マッコーマスは口の隅をきつと下に向けて、クランプトンの方へ行く。クランプトンは手を後へまはして、後退りながらじつと見る。マッコーマスの額は、いつもより一層開いて、一點疵しからぬ儀容をして、クランプトンに對す。）

給仕人　（行きかけて、フィルの前を通る時、小さい聲で）あの方に打明けましたよ、あなた。

フィリップ　えらい〳〵ウォリアム先生！（卓子の方へとほり過る）。

ドーリー　（小さな聲で給仕人に）それでどんな容子をしたえ。

給仕人　（小さな聲で）最初には吃驚なさいましてな、お嬢様。しかしやがてお諦めになりました――すつかり諦めておしまひなさいましたよ、お嬢さま。（杖と外套とをホテルへもつて行く）。

マッコーマス　（へどもどさせる程クランプトンを見て）やつて來ましたね――クランプトンさん。

クランプトン　うむ、來た――罠にかゝつて――淺猿しい罠にかゝつて。これがわしの子供たちかね。

フィリップ　（恐ろしく丁寧に）この方がわたしどもの阿父さんですか、マッコーマスさん。

マッコーマス　左様です――うむ――（われながら度を失つて言がとまる）。

ドーリー　（舊式に）お久しぶりでしたわね。（卓子のまはりをぶら〳〵して、間にヴアレンタインと顔見合して笑ひ、ちよつと挨拶する）。

フイリップ　主人の第一の義務として、御好みの酒を命じたいと思ひますが。（卓子から酒の書付を取る。フイリップの懇懃な待遇とドーリーの一向無頓着な容子は、クランプトンをして、今朝齒科醫のとこで不意に逢つた時と、同じ樣に感ぜしめる。左樣思ふと、父なる人は總身が戰へるほど、一種銳い苦痛を感ずる。額には汗がじと〳〵して來て、默然として倖をじつと見る。フイリップは此際ふざけたり、洒落を云つたりするは、冷淡過るとは知りながらも、尙ほ元氣にしやべりつゞける）フィンチさん。あなたには古いポートワインがいゝでせう。尊敬すべきお抱辯護士には、えゝ。

マッコーマス　（しつかりと）アポリナリスの炭酸水で澤山です。つよ

いものは何でも御免です。（高臺の側面へ歩き去る。誘惑を斬りぬけた人の樣に。）

フイリップ　ヴアレンタイン君、君は――

ヴアレンタイン　レーガア麥酒は下等でせうかね。

フイリップ　さうかも知れない。が、少し取りませう。ドーリーもやりますよ。（愛相よく丁寧にクランプトンに向ひ）そこで、クランプトンさん、あなたには何をさし上げませう。

クランプトン　何だつて、小僧さん。

フイリップ　小僧さん！（極眞面目に）僕の小僧なのは誰の所爲でせうかな。

クランプトンは亂暴にフイリップから酒の書付をひつたくり、躊躇しなが

らそれを讀むまれする。フイリップは極めて丁寧に書付を渡す。

ドーリー　（クランプトンの右の肩越しに見て）ウッスキーはおしまひの前の頁にありますよ。

クランプトン　うつちやつて置いてもらはう、娘や。

ドーリー　娘や！いけません、いけません。何卒ドーリーつて呼んで下さい。娘なんて呼んぢやいけませんわ。（フィルの手へ自分の手をさし込む。而して二人は、クランプトンが飛離れた變人でゝもあるやうに立つて見て居る）。

クランプトン　（憤怒と苦悶に額をこすつたが併し兩人が自分をからかつてるので却つて樂になつた樣な氣がする）　マッコーマス。おいらは――はゝは！――愉快に御馳走になれさうだね。

マッコーマス　（意氣地なく）愉快でないわけはないぢやないか。（いやにふさいで居る）。

フイリップ　フインチさんの顏それ自身が御馳走の一つだ。

クランドン夫人と、グローリヤとがホテルから出て來る。クランドン夫人は勇氣を鼓して自重心を示し、目に立つ程、容態ぶつて前に進む。而して丁度前へ來たヴアレンタインに話しかけやうとして、上り段の處でとまる。グローリヤも立止つて、何となく變な工合でクランプトンを見る。

クランドン夫人　能く來て下ださいましたね、ヴアレンタインさん。（ヴアレンタイン微笑する。夫人は通り過ぎて、クランプトンと相對す。夫人は落着いて彼に話しかけやうとして居たのだが彼の容子で吃驚する。夫人は突然立止り、いさゝか悔恨の情を以て心配げにいふ。）フアガス。隨分

變りましたねえ。

クランプトン　（怖い顔して）左樣かも知れないね。十八年の間には誰でも變るさ。

クランドン夫人　（まごついて）わたし――わたしはその積りで云つたんぢやないんです。身體は丈夫でせうね。

クランプトン　有難う。いや、身體の事ぢやあるまい、身の上の事だらう。汝さんが變つたといふのは。（突然激昂して）この女を見てくれ！マッコーマス、この女を見てくれ！そして（半ば笑ひ半すゝり泣きして）わしを見てくれ！

フィリップ　しつ！（ホテルの入口に指さしする。と、給仕人が丁度出て來る）ウキリアムの前ですからおしづかに。

ドーリー　（戒めるやうにクランプトンの手にさはつて）えへん！

給仕人は給仕卓子の方へ行つて、塞所の入口へ手招すると、そこからスープ皿をもつた若い給仕人と、スープ入れをもつた、白の前かけに白い帽子の料理人がはいつて來る。若い給仕人は殘つて給仕をし、料理人は出て往つたが、時々料理をもつては歸つて來る。料理人は肉を切るが給仕はしない。給仕人は階段に近い食卓の横に來る。）

クランドン夫人　（一同卓子に集まると）みなさんは、今日既にお知合になつて居らつしやるのですね。いや、御免下さい。（紹介する）ウアレンタインさん、マッコーマスさん。（ホテルに近い卓子の横へ行く。）フアガス、あなた主人の席について下さい。どうぞ。

クランプトン　はゝ！（苦々しげに）主人の席！

給仕人　（罪のない勸めかたをして、椅子をもちながら）こちら側へ、へえ。

（クランプトンも負けてしまつて席に着く）。恐れ入ります、へえ。

クランドン夫人　ヴアレンタインさん。あなた、こつち側へ願ひます、（手摺に沿うた側を指して）グローリヤと。（ヴアレンタインとグローリヤと席に就く、グローリヤはクランプトンの次、ヴアレンタインはクランドン夫人の次になる）。フインチさんこつち側へすわつて下さい、ドーリーとフイルの間へ。あなた一生懸命に用心なさらなくちやいけませんよ。（三人は殘つた席につく、ドーリーは母の次、フイルは父の次、マツコーマスは二人の間。スープが出る）。

給仕人　（クランプトンに）濃いのに致しませうか、薄いのに致しませうか、へえ。

クランプトン　（クランドン夫人に）此家庭では、一人も祈禱をあげる人は無いのかね。

フイリップ　（如才なく仲へ入つて）兎に角、もらふものをきめるとしませう。ウキリアム。

給仕人　へえ、へえ。（手早く卓子をまはつて、フイルの左の肘の方へついと行く。其途中で若い給仕人に囁やく）濃いのを。

フイリップ　いつもの通り、子供たちにレーガアの小壜を二本、ウキリアム。（ヴアレンタインを指して）このお客さまに大を一本。マツコーマスさんにアポリナリスの大を。

給仕人　へえ、へえ。

ドーリー　その中へアイリッシュ、ウキスキーをどつさり入れたい

んでせう、フィンチさん。

マッコーマス　（癪にさはって）澤山です――澤山です。

フイリップ　阿母さんとグローリアには、前のやうに四百十三號の葡萄酒、それから――（クランプトンを振向いてたづねる）えゝ？

クランプトン　（佛頂面をして、不興らしく答へやうとする）わしは――

給仕人　（調子よく口を入れて）承知致しました、へえ、クランプトンさまのお好きなのは手前よく存じて居ります、へえ。（ホテルへ行く）。

フイリップ　（眞面目に父を見て）あなたはよく酒場へいらつしやいますか。よくない習慣ですね！（料理人は、あつい皿を客に出して居る給仕人と一緒に、臺所から給仕食卓へ肴をもつて來て、それをきりはじめる）。

クランプトン　おまへは阿母さんから、そんな事を習つたのだな。

クランドン夫人　フィル。おまへどうぞ氣をつけておくれ。おまへの冗談はね、わたしどもを能く知らない人を、屹度怒らせるよ。それにおまへの阿父さんは、けふはお客さまなんだからね。

クランプトン（苦々しげに）さうだ、主人の席にすわつてるお客さまだ。（スープの皿がひかれる）。

ドーリー　（同情して）ほんとうですわ、困るでせう！わたしたちだつて忌やですわ。

フイリップ　しつ！ドーリー、僕たちは懸引を知らない。（クランプトンに）僕たちは惡氣はないんです、クランプトンさん。併し僕たちは、親孝行なんて事にかけては餘り本氣にならない方です。

（給仕人飲料をもつてホテルから還つて來る）。ウキリアム、こゝへ來て、皆の機嫌を直してくれ。

給仕人　（陽氣に）へえ、へえ。承知致しました、へえ。あなたには麥酒の小壜と。（グランプトンに）セルツア炭酸水に、アイリッシュ、ウヰスキー。へえ。（マッコーマスに）アポリナリス炭酸水、へえ。

（ドーリーに）レー！ガアの小壜、へえ。（グランドン夫人には葡萄酒を注いで）四百十三號、奥樣。（ヴアレンタインに）あなたにはレーガアの大、へえ。（グローリヤに）四百十三號、へえ。

ドーリー　（一口呑みながら）一家の幸福を祝します！

フイリップ　（一口呑んで）家庭の平和を祝します！（看が出て來る）。

マッコーマス　（しひて一家の人々を陽氣にしようと力めて）兎に角大分工

合がよくなりましたね。

ドーリー　（批評的に）兎に角！兎に角どう？フィンチさん。

グランドン　（皮肉に）おまへがたは大分工合がよくなつたといふ話しさ、阿父がこゝに居ても。圖星だらう、マッコーマスさん。

マッコーマス　（まごついて）いや〳〵、わたしはたゞ話の都合で、『兎に角』と云つたのだす。わたしは――うむ――うむ――うむ――

給仕人　（呼吸よく）へえ、比目魚でございますか。

マッコーマス　（此邪魔が入つたのをひどく有難がつて）有難う、給仕人、有難う。

給仕人　（小聲で）どう致しまして、へえ。（給仕卓子へ還る）。

グランプトン　（フイルに）おまへはまだ職業を選むことを考へない

のか。

フイリップ　その問題については、僕はまだ考へ最中です。おい、ウ

キリアム。

給仕人　へえ、へえ。

フイリップ　おまへはどの位かゝると思ふかね、僕がほんとうに敏

捷い給仕人になる稽古をするには。

給仕人　稽古をしてもいけません、へえ。性質によりますからな。

（何か見廻して居るヴアレンタインに小さな聲で）お嬢さんへパンを差

上げますのでございますか、へえ、へえ。（グローリヤにパンを出し、前

の調子で又喋舌り出す）これに生れついて來るものは、極わづかで

ございますよ。

フイリップ　おまへは息子と云つた樣なものを有つたことはなか

つたかね。

給仕人　ございますとも、えゝ、ございますとも（また聲を低めて、グロ

ーリヤに）お肴をも少しいかゞでございます、お嬢さま。日中に

燒肉はうれしかあございますまいな。

グローリヤ　もう澤山。（肴の皿をひく）。

ドーリー　おまへの息子もやつぱり給仕人なの、ウ　キリアム。

給仕人　（グローリヤに鷄を出して）如何致しまして、お嬢さま。あれ

は馬鹿に性急な男でございましてね。只今はBarに居ります。

マツコーマス　（鼻頭振に）酒屋の番頭かな、えゝ。

給仕人　（時日の爲めに薄らいで居た失望を又思ひ出しでもしたやうに、愁然

たる容子で）いゝえ、他のBar――あなたと同職業でございます。

へえ、王室辯護士でございます。

マッコーマス　（まごついて）いや、こりやあ、失禮した。

給仕人　とんでもない。誰人でもある間違でございますよ、全く。手前も時々、居酒屋の番頭になつてくれゝばよかつたと思つた事がございましたよ。さうすればもつとずつと早く手前の手が拔けたらうと思ひます。（又變な顏をして居るヴァレンタインに、小さな聲で）鹽はお手近にございますよ、へえ。（又話にかゝる）全くでございますよ、へえ。あれが三十七になるまで世話を致しましたが、只今では樂に暮して居ります、へえ。至極結構に、へえ。五百圓より一文だつてかけたことはございませんからな、

へえ。

マッコーマス　民主主義だね、クランプトンさん！――近世的民主主義だね！

給仕人　（靜かに）いゝえ、民主主義などではございません。たゞ教育でございます、へえ。はじめは給費生、それからケンブリッヂの檢定試驗、それからシドネー、サセックス大學となへえ。（ドーリーは給仕人の袖を引き、それがこゝむと何かさゝやく）。瀨戸壜のジンジヤアでございますか、へえ、畏まりました。（マッコーマスに）あれはまことにいゝ仕合せでな、へえ。何しろあれは實務にかけてはまるで才がないんでございますからな。（ホテルへ行くあとへ殘つた一同は、彼が息子のえらいので、少々おどかされた）。

ヴアレンタイン　皆さんの中に、あの男に尙一度用をいひつける勇氣のある人はありますか。

ドーリー　ジンジャアビーアのお使ひをさしたのを氣にしてくれないといゝがねえ。

クラントン　（苦い顏をして）あの男も給仕人をしてる中は、用を足すのがあの男の職務だ。若し君たちが、あの男を給仕人相應に取扱つてやつたら、あの男も舌を動かしはしなかつたらう。

ドーリー　さうすりや、大變な損だつたわ。屹度あの人は、息子さんへの紹介狀をわたしたちに呉れて、わたしたちを倫敦の交際社會へ入れてくれるでせう。（給仕人はジンジャアビーアをもつてまた入つて來る）。

クランプトン　（蔑んだ樣にいがみ出す）倫敦の交際社會！倫敦の交際社會だつて!! おまへはどんな交際社會だつて入れやしない、娘。

ドーリー　（癇癪を起して）まあ、クランプトンさん、若しあなたが――

給仕人　（物やはらかに、ドーリーの手近にすゝみ）さあ、お嬢さん、瀨戸壜のジンジャアでございます。

ドーリー　（あつけに取られ、太息をついて機嫌を直す、そしてやさしくいふ）有難う、ウォリアムや。おまへいゝ時に來てくれたね。（一杯飲む）。

マツコーマス　（話題をあたりさわりのないところへもつて行かうと、また新たに骨を折り出す）一つ問題を換へたいと思ひますが、グランドンのお嬢さん、マディラの國教といふのは、何ですかな。

グローリヤ　葡萄牙の宗教なんでせう。わたしは聞いて見た事も

ありません。

ドーリー　下女や下男が大齋の時にやつて來ましてね、あなたの前に膝をついて、自分たちのした事をのこらず懺悔しますわ。而したらあなたは、それを許してやるやうな顔をしなけりやならないの。英國でもそんな事をするかえ、ウヰリアム。

給仕人　普通にはやりません、へえ。やるところがあるかも知れませんが、併し手前は氣がつきませんでございました、お嬢さま。

（若い給仕人がサラダの鉢をクランドン夫人に出した時、夫人の目を一寸と見て）奥樣は何にもかけないのがお好きでしたね。えゝ、あなたには別に取つて置きました。（グローリヤに給仕をしろと若い仲間に顧を動かして見せて扨いふ）こつち側だよ、ジョー。（給仕卓子から別盛のサ

ラダを一人前もつて來て、それをクランドン夫人の側へ置く。この間にドーリーが澁面づくつてるのを見て）田芥子をほんの少々、間違つて入れました（ドーリーのサラダを取去る）。恐れ入りました、へえ。（ドーリーにあたらしいのを上ろと若い給仕人に氣をつける）ジョー。（前の話をつゞけて）重に英國敎會の會員がやるさうでございます、へえ。

ドーリー　英國敎會の會員！會費はいくら位だね。

クランプトン　（あら〳〵しく立上る、一同吃驚する）マッコーマス、君あ、わしの子供たちがどんな風に敎育されたかつて事が、よく分つたらう。君あ、それを見たり聞いたりした。わしは諸君を證人にして——（呂律が廻らなくなつて、握り拳でめちや〳〵に卓子をなぐりつけやうとする。給仕人は思慮ぶかく前の皿をかたづける）。

クランドン夫人　（決然と）お坐んなさい、ファガス。そんなに怒鳴り立てべき理由はちつともないぢやありませんか。ドーリーは此の土地ではまるで外國人のやうなものだつて事を記憶していたゞきたいのです。まあお坐り下さい。

クランプトン　（不承不承にしづまつて）こゝに坐つて、こんな事を見せつけられなけりやならないものかな、あゝ、わしには分らなくなつた。

給仕人　チースは如何さま、へえ。それとも冷めたいお菓子がよろしうございますか。

クランプトン　（あつけに取られて）えつ？あゝ！――チースがいゝ、チースがいゝ。

ドーリー　紙巻煙草の箱をもつておいで、ウヰリアム。（給仕人は給侍卓子から巻煙草の箱をもつて來てドーリーの前へ置く。ドーリーはその一つを選り出して吸はうとする。と給仕人は蠟マッチの箱をとりに、自分の卓子へ還る）。

クランプトン　（驚いてドーリーをじつと見て）おまへは煙草を吸ふのか。

ドーリー　（我慢が出來なくなつて）クランプトンさん、わたしは屹度あなたの御馳走をまづくしたでせうね。わたしは海邊へ行つて、煙草を吸ひませう。（腹立紛れについと卓子を離れて階段を下りて行く。給仕人はドーリーにマッチをやらうとするが、その前にドーリーは下りてしまふ。）

クランプトン　（いきり立つて）マアガレット、あの娘を呼戻しなさい、あの娘を呼戻せといふに。

マッコーマス　（なだめやうとして）まあ、クランプトンさん、氣にする事はないさ、あの娘さんだつて矢張阿父さんの娘ですよ。それだけの事なんですよ。

クランドン夫人　（いかにも癪にさはつた風で）うつちやつて置いて下さい、フィンチさん。（立上る、一同中腰になる）。ヴアレンタインさん、どうぞ御許し下さい。ドーリーは屹度、今の始末で心もちを惡くして、出て行つてしまつたのです。わたしは行つて見なけりやなりません。

グランプトン　おまへは、わしに逆つて、あの女の肩をもたうといふのだな。

クランドン夫人　（目にもかけず）グローリヤ、わたしがあつちへ行つて

る間、わたしの代りをして居て下さいね。（階段の方へ行く。クランプトンはいま〳〵しさうに見送る。一同は此騒ぎを如何にも苦痛に感じたので、妙に默り込み、夫人を見送る）。

給仕人　（階段の下り口で、夫人を遮ぎり、蠟マッチの箱を出して）お嬢さまがマッチを御忘れになりました。恐れ入りますが、奥樣。

クランドン夫人　（此男のやさしい陽氣な聲の調子は、人の心を蕩かす樣なので、夫人はハットとして禮をいふ程丁寧になる）どうも有難う。（マッチを取つて海邊へおりる。給仕人は助手のあとからついて臺所口からホテルへ入る。あとには食事の連中だけが殘る）。

クランプトン　（椅子に身を投げ出して）あれが阿母かな。（マッコーマス！　あれが阿母かな！

グローリア　（屹然として）えゝ、好い阿母さんですわ。

クランプトン　そして惡い阿父か、おまへはさういふつもりなんだらう、えゝ。

ヴアレンタイン　（にが〳〵しげに立上り、グローリヤに話しかける）　クランドンさん、わたしは——

クランプトン　（ヴアレンタインの方へ向き）　此娘の名はクランプトンといふのだ、ヴァレンタイン君、クランドンといふのではない。君も一緒になつてわしを侮辱しようといふのか。

ヴアレンタイン　（耳にも入れず）　どうも一言もありません、クランドンさん。みんな私がわるかつたのです。この人をこゝへ連れて來たのはわたしです。この人についてはわたしが責任を負はなけりやなりません。全く面目次第もありません。

クランプトン　何を云つてるんだ。

グローリヤ　（冷然として立上り）　何も惡い事はありはしません、ヴァレンタインさん。でもわたしたちは少し子供らしかつた樣です。けふの宴會は失敗でした、これで解散して止める事にしませう。（椅子を側へやり階段の方へ向く。而してクランプトンの側を通る時輕蔑する樣な容子で云ひ足す）、　阿父さん、左樣なら。

心地は惡さうだが、兎に角冷然として何氣ない風で階段をくだる。一同はグローリヤを見送る。そのために給仕人がホテルから歸つて來たのに氣がつかなかつた。給仕人はクランプトンの外套、ヴアレンタインの杖、シヨール二つに、日傘を三つ、白ズックの大傘に、床几いくつかを持つて來る。

クランプトン　（情けなさうな顏付をして、しげ〳〵とグローリヤを見送つたのち、獨語のやうに）　阿父さん！　阿父さん　（握拳であら〳〵しく卓子

をたゝく)。一體――

給仕人　(外套を出して)　これがあなたのでございませう、へえ。(クランプトン給仕人を睨めつけ、あら〳〵しくそれをひったくり、椅子の方へ高蹇を下り、腹立紛れにそれを着やうとするが、なか〳〵手が入らない。マッコーマスは立上って、その手傳ひに行き、さて小さい鐵の卓子から、帽子と傘とをとって、階段の上へ向く。その間に給仕人は、落着いたやさしい調子で、クランプトンに外套を取ってくれた禮をいひ、フィルに自分がもってる着物をいくらか差出す)。

御婦人がたの日傘で、へえ。けふはいやに沖が照りかへします、へえ。これぢやあ、日に燒けてたまりません。床儿はわたしがもつて參りませう、へえ。

フィリップ　阿父さんのウォリアム、おまへは年をとつてるが、實に考へぶかい人間だ。いゝよ。傘をもつてくれ、床儿は僕がもらはう(床儿をとる)。

給仕人　(お世辭らしく禮をいふ)　へえ、有難うございます。

フィリップ　フィンチさん。手傳つて下さい(その中二つだけ渡して)さあ入らつしやい。(一緒に階段を下って行く)。

ヴァレンタイン　(給仕人に)　わたしにも何かもつてくものを殘しておくがいゝ――何か一つ(日傘を取らうとする)。

給仕人　(愼重な態度で)　これは若い方のお嬢さまのでございますよ。(ヴァレンタイン手をひく)　ありがたう、へえ。恐れ入りますが、これを御持ち下すつた方がよろしいかと存じますよ。へえ。(日傘をクランプトンの椅子の上に置き、自分の燕尾服の背後の隱袋から、讀みさしのしるしに、女の手巾を入れてある書籍を一册とり出す)。御總領のお嬢

さまは、之を讀んでゐらつしやるんでございます。（ヴアレンタイン熱心にそれを取る）。へえ、ありがたう。ね、ショッペンハウアでございます。（再び日傘を取上げ）中々面白い著者でございますね、わけて婦人の問題にかけましてはな。（階段を下る。ヴアレンタインはついて行かうとして、グランプトンの事を思ひ出し、考へなかへる）。

ヴアレンタイン　（稍昂奮してグランプトンの方へ來る）まあ、如何です、グランプトンさん。あなたは自分で恥しいと思ひませんか。

グランプトン　（喧嘩腰で）自分で恥しいと！　何のためにさ？

ヴアレンタイン　熊見た樣なあれ方をしたので、あなたの娘さん達は、わたしを何と思つてるでせう、あなたをこゝへ連れて來たについて。

グランプトン　わしの娘が君の事を考へてゐやうとは、わしゐ思つちや居なかつた。

ヴアレンタイン　さうでせう、あなたはあなたの事しか考へてない。あなたはほんとうの自我狂だ。

グランプトン　（斷腸の思ひで）あの女は君に左樣いつた、わしは――父だ――子供たちを奪はれた父だと。一體今日の時代の氣質とは如何なものだ。わしは此何年といふもの經つてこゝへ來て――初めて自分の子供の容子を見て！　其聲を聞いて！――而して自分はといふと、ハイカラのお客見た樣に氣取つて、不意に食事に呼ばれて來たのに、グランプトンさんだとさ――グランプトンさあんと來た！　あいつらがわしにあんな喋舌

り方をするなんて、一體どんな權利があるんだ。わしはあいつらの父だ、あいつらだつて嘘とはいへまい。わしだつて普通の人情をもつてる人間だ。わしには何の權利もないのか、それを主張する何の力もないのか。この長年の間、どんなものがわしの周圍に居たと思ふ。下男に、番頭に、商賣上の知合。わしは左樣いふ手合から尊敬されて居た――えゝ、親切にされて居た。其手合の中にあの娘見たやうな口の利きかたをしたものが一人だつてあるものか――その手合の中に、あの小僧がしよつちゆうやつてたやうに、わしを笑つたものが一人だつてあるものか。（狂氣じみて）あゝ、わしの子供が！　クランプトンさんといやがる！　わしの――

ヴアレンタイン　まあ、まあ。あの人たちはたゞの子供です。でも、あの中でたつた一人いくらか物のわかる人が、あなたを阿父さんといひましたよ。

クランプトン　さうだ、『阿父さん、左樣なら』。左樣ならだとさ！ほんとうだ、あいつはわしの胸を刺しやあがつた――只一突に！

ヴアレンタイン　（いよ〳〵心地を惡くして）　まあ、お聞きなさい、クランプトンさん。あの人の事は云はないが可い。あの人はあなたを大變によく扱つたぢやありませんか。あなたよりわたしの方が、餘程つまらない食事に出つくわした。

クランプトン　君が！

ヴアレンタイン　（猛烈になつて）　さうです、わたしがです。わたしは

あの人の隣にかけて居た。而して始めからしまひまで一言も口を利かなかつた――巧い語なんぞは思ひつきもされなかつた。あの人は一言だつてわたしに話しかけてくれなかつた。

クランプトン　そこで？

ヴアレンタイン　そこで？そこでだつて？？？（手ひどくクランプトンを掴へだん〳〵烈しく饒舌る）　クランプトンさん。けふわたしが如何な目に逢つたかあなた知つて居ますか。まさか、あなただつて、いつもわたしがあなたに戯ふ樣に、患者にも同じいたづらをするとは思つて居やあしますまい。

クランプトン　思ひたくはないものだね。

ヴアレンタイン　眞實のところ、わたしは夢中なんです。いや、前に

はこれほど眞面目になつた事はなかつたといふ方がいゝ。わたしにはもう何でも出來ます。わたしはとう〳〵大人になりました。わたしは一個の男子です、而してわたしを男にしたのはあなたの娘さんです。

クランプトン　（信じられないやうに）　君はわしの娘に思ひついたのかね。

ヴアレンタイン　（彼の語は今や瀧津瀨の如く奔放になる）　思ひ付てる！馬鹿なつ！そんなものよりは遙か以上な別なものです。生命です、信仰です、力です、實際です、樂園です――

クランプトン　（畳々しげに輕蔑した樣子で、遮り止め）　くだらないつ！君は女房をくはせるだけのものを有つてるか。あれと結婚す

る事が君には出來るものか。

ヴアレンタイン　だれがあの人と結婚したいと云ひました。わたしはあの人の手に接吻したい。わたしはあの人の足下に跪きたい。わたしはあの人のために生きたい。わたしはあの人のために死にたい。そしてわたしはそれで十分なのだ。あの人の本を見て御覽なさい！（手巾に接吻する）。わたしが海邊へ下りて行つても一度あの人と話をするのを御免蒙りたいと云つて、あなたのもつてる金を殘らずわたしに提供しやうとも、わたしはたゞ一笑に附するのみです。（有頂天になつて階段の方へかけ出す。と、給仕人が海邊から上つて來たので、その兩腕の間へ眞直に飛込む。而して二人は相互に腰を抱き合ひ、双方くるりとまはつたので、反轉らずに濟む）。

給仕人　（調子よく）　しつかりなさいましし、しつかりなさいまし！

ヴアレンタイン　（自分ながら亂暴なのにハツとして）　失敬、失敬。

給仕人　恐れ入ります、へえ、恐れ入ります。あたり前でございますとも、あなたの御年配では。あのお嬢さまが本をもつて來いと仰有いましてな。失禮でございますが、直にあの方へさし上げたいと存じますが、へえ。

ヴアレンタイン　いゝとも。それから若しおまへさへいやでなかつたら、わたしは醫師さまが六週間かゝつて儲けたものを、おまへに上げたいと思ふが——（ドーリーが拂つた二圓五十錢銀貨を給仕人に渡さうとする）。

給仕人　（思つたよりは餘程大金でゞもある樣に）　有難うございます、ど

うも相濟みません。（ヴァレンタイン階段を馳せ下る）。　どうも元氣な若旦那でございますな、如何にも男らしい、素直に出來上つた。

クランプトン　（ぶつくさ惡口する）　金儲けにばかりあせつてやがる、ほんとうに。六週間の儲けがいくらになつたか、ちやあんと知つてるんだ。（高壇を横ぎつて、鐵の卓子の方へ行き腰をおろす）。

給仕人　（哲學者然と）　ところが、あなたさきの事は分るもんぢやあございません。と、申すのが、手前の世渡りの主義なのでございます、へえ。手前が、かやうなことを申上げては、生意氣でございますが、へえ。（が忽ち哲學者ぶつた所を手際よく給仕人らしく隱してしまつて）　あなたは此炭酸水とウォスキーとに、手を御つけにならなかつた事を御忘れでございませう、宴會が中止になりました

時にな。（食卓からコップを取つて、それをクランプトンの前に置く）　えゝ、全く、將來の事は分つたものぢやございません。手前の倅なぞもな、絹の法服を着る身分にならうとは、誰が思ひつきませう。ところが今日では、あなた、五百圓より一文だつてかけた事はございませんへえ、之がいゝ手本ぢやございませんか！

クランプトン　そこで、その息子さんはおまへに感謝してるだらうね、おまへの恩を忘れずに。

給仕人　わたしどもの間は、極く工合よく、ごーく工合よく、行つて居りますよ、へえ、お互に身分の違つて居りますわりにはな。（又例の突拍子もない移り氣で）角砂糖の小さいのを一つ如何でございます、大して呑口を甘くは致しませんで、炭酸水の空淡が取れて

しまひます。御免下さいまし、へえ。（コップへ角砂糖をおとす）併し手前があれに申すのでございますがな、つまるところ身分の相違なんてものがあるわけのもんぢやあございません。手前は制服として燕尾服を着なければなりません。と、彼も制服として鬘や法服をつけなければなりません。手前の收入は重に御祝儀で、それを手前はいたゞかないやうな顔を致して居ります。と、如何でございます。あれの收入も重に御禮で、矢張そんなものはいたゞかない樣な顔を致して居るらしいのでございますよ。あれは交際社會がすきで、あれの職業が、あらゆる階級のかた〳〵と知合になるのだと致しますと、手前だつて同じ事でございます、へえ。給仕人を父にもつのが、辯護士に取つて少

々困ると、申しますなら、辯護士を息子にもつのが、給仕人に取つても少々困ります。併し皆さんはそれを大きな自由だと考へて居らつしやいます、へえ、全くでございますよ。何ぞ他にめし上るものをもつてまゐりませうか。

クランプトン　もう、澤山だ。（謙遜しながらも苦々しげに）すこし位こにかけてゝも差支はあるまいね。こゝに居たつて海邊に居る連中の邪魔にはなるまい。

給仕人　（氣の毒さうに）あなたは全く親切で居らつしやる、それがまるで手前どもへの御好意でもお世辭でもない樣な仰有り方をなすつて。クランプトンさま、あなたは全く御親切でゐらつしやいますよ。あなたが自分の御家に居らつしやる樣に心地

よくこゝに居て下されば下さるほど、手前どもは有難いのでございますよ。

クランプトン　（鋭どい皮肉で）　自分の家に！

給仕人　（思案して）　えゝ、左樣でございますよ、へえ。それも矢張見やうでございますよ。手前は始終申して居るのでございますがな。御自分のお家からの逃込み場處に遊ばすことの出來ますのが、ホテルと申すものゝ大きな利益でございますよ、へえ。

クランプトン　わしは其利益が得られなかつたやうだ、今日は。

給仕人　いけませんでしたな。いけませんでしたな。まことに如何も！思ひがけない事は、能く起りたがるものでございますよ、へえ。（首を振つて）　さきの事は分るもんぢやございません、へ

え、さきの事は分るもんぢやございません。（ホテルへ行く）。

クランプトン　（悲しさうな情なさゝうな顏を手に支へて居るが、目はドンヨリして居る）自分の家！自分の家！！（兩手を卓子に落し、その上に頭を垂れる。が、やがて誰か近づく跫音を聞いて、あわてゝ眞直にかける。獨り階段を上つて來たのはグローリヤで、兩手に傘と本とをもつて居る。クランプトンは喧嘩面でグローリヤを見る、而して其恐ろしい强情な口付と、物思ひに沈んでる目付とは、互ひにあはれな矛盾を見せて居る。グローリヤは庭椅子の角へ來てそれへ背を向け、その端の方へもたれかゝつて、クランプトンの弱いのを變に思ひながらも、それを見下して立つて居る。クランプトンに對しては餘程好奇心をもつて居るから冷淡といふほどではないが併し親戚の愛情といふ樣な事には、構つて居られぬといふ風である）。如何したね。

グローリヤ　ほんの、ちよいとあなたと御話したいと思ひまして。

クランプトン　（じいっとグローリヤを見て）成程？が、實に驚いたな。おまへは十八年目でおまへの阿父さんに逢つたんだよ。而しておまへはほんのちよいと阿父さんと話がしたい！情ないぢやないか、えゝ。（手を頭にあてゝ見下し悲しさうに考へ込んで、グローリヤから離れる）。

グローリヤ　そんな事は、わたしにはくだらない餘計な事としか思はれません。あなたはわたしたちにどんな事を思つてもらひたいと仰有るのです――どんな事をしてもらひたいと仰有るのです。あなたは如何してもらひたいのです。あなたは何故他の人よりも、さう亂暴なんでせう。あなたはたしかにわたしたちが御好きでないやうですが――一體何故さうなんでせう。

併しお互に喧嘩をせずにも御目にかゝれる筈ですがね。

クランプトン　（恐ろしい陰鬱な影が顏の上にかゝる）汝はわしが汝の父だといふことを承知して居るだらうね。

グローリヤ　十分に。

クランプトン　おまへは心得て居るかね、おまへの父たるわしに盡すべき事を。

グローリヤ　たとへば――？

クランプトン　（妖怪と闘はんとするが如く立上り）たとへば！たとへば!!たとへば、義務とか、愛情とか、尊敬とか、服從とか――

グローリヤ　（だらしなく凭かゝつて居た態度をやめて、がばと立上り傲然と彼に對す）わたしは正義の觀念以外何にもしたがひません。わた

しは高尚でないものは、何をも尊敬しません。それがわたしの義務です。（言を足しかけたが稍不安になる）愛情に至つては、わたしの自由にはなりません。わたしは眞實に愛情とは如何いふものかといふことを知つては居ないやうです。（此問題に關しては如何にも趣味がなさいうに振向く、而してかけ心のよさいうな椅子を取りに、食卓の方へ行つて、本と日傘とを置く）。

クランプトン　（ゲローリヤを目送して）　おまへは口で云つてるだけの事をほんとうに思つてるのかね。

ゲローリヤ　（すばやく且つ嚴然と向き返つて）失禮ですが、隨分亂暴な御質問ですね、わたしは眞面目に申上げてるんですよ、だからあなたにも眞面目に聞いていたゞきたいのです。（食卓の椅子を一つ取り、食卓からそれをクランプトンの方へ振向ける。而して稍疲れた樣に腰かけていふ）あなたは冷靜に合理的に此問題を論ずるわけにはいきませんか。

クランプトン　冷靜に、合理的に！いや、わしには出來ない。それがおまへにや分らんか。わしには出來ない。

ゲローリヤ　（力を入れて）えゝ、分りません。わたしには同情がありませんから——

クランプトン　（臆病らしく身をすくめて）待つてくれ！もう何にも云つてくれるな、おまへは自分の云てる事が分らないのだ。おまへはわしを氣狂にしようと思つてるのか。（ゲローリヤは父のこの癇癪に我慢がならなくなつて、しかめつ面をする。クランプトンはいそいで言を

つゝる）いや、わしは怒つては居やあしない。全く怒つちや居ない。待つてくれ、待つてくれ。まあわしに一寸考へさしてくれ。

（滅茶苦茶になつて、眉を寄せ、手を振絞つてしばらく立つて居たが、やがて食卓から横手の椅子を取つて、グローリヤの側に腰かけ、一生懸命におだやかに氣を練らせやうとしていひ出す）やう〳〵分つたやうだ。いや、兎に角分つて見るつもりだ。

グローリヤ　（すつぱりと）さうら御覽なさない！何でも是非かうとさへ考へれば、屹度うまく行くものです。

クランプトン　（俄かに不安になつて）いや、考へずに感じてもらひたい。その外には如何ともしやうが無いんだからな。まあ、聞いてくれ！おまへはな――いや、其前に――何だか分らなくなつてしまつた。おまへ名は何といふね。おまへの寵名の事だよ。まさかソフロニヤとは云やあしまいね。

グローリヤ　（吃驚しながらも忌々しさうに）ソフロニヤ！わたしの名はグローリヤと云ふのです。わたしはその名で通つて居ります。

クランプトン　（また癇癪を起して）おまへの名はソフロニヤだ、女。わしの妹で、おまへの叔母さんのソフロニヤの名を取つて命けたんだ。叔母さんは、おまへの持つたはじめての聖書へ、自分の名をかいておまへに呉れたのだ。

グローリヤ　それから後に阿母さんが、新らしい名を下すつたのです。

クランプトン　（怒つて）彼女にはそんな事をする權利はない。そ

んな事はわしが許さん。

グローリヤ　妹さんの名を、わたしにつけるなんて權利は、あなたにはありません。わたしそんな人は知りません。

クランプトン　おまへは愚にもつかないことを云つてる。おれの我慢にだつて限りがあるぞ。おれはもう聞かない。おい、分つたか。

グローリヤ　（戒める樣に立上り）　あなたは何處までも喧嘩をなさらうといふのですか。

クランプトン　（怖くなつて賴むやうに）　そんな事はない、そんな事はない、まあかけてくれ。これかけてはくれないか。（グローリヤは彼を心配させたまゝにして打成る。クランプトンは己むを得ず寢にさはる名前

を口にする）。グローリヤ。（グローリヤは唇をちよいと結んで滿足の體なし、それから腰をかける）。　さうだ！　ね、わしはたゞおまへの父だといふことが分つてもらひたいのだ――なあ、娘や。（なつかしさうな語が氣の毒なほど不手際なので、グローリヤはわれにもあらず微笑して少しはクランプトンの思ふまゝにさせて居る）。　まあ、聞いてくれ。　わしはおまへにかういふことを聞きたいのだ。　おまへは少しもわしを覺えては居ないかな。　おまへがわしの手から持つて行かれた時には、おまへはほんとうに小さい子供だつた。　が、おまへはもういろんな事が分つて居たつたよ。　おまへは自分で愛して居た人、（稍氣まりわるさうに）　といふ程でなくとも、子供心で好きだつた人を覺えては居ないかな。　えゝ、おまへを書齋に置いて、

おまへが玩弄の船と思つてたものを見させて居た人の事を。
（何か返事をしてくれるかと、ゲローリヤの顔を心配さうに見て居るが、次第に頼み少なさうになるにつれて、いよ〳〵あせつて來る）そこでおまへの好きな事をさせて、たゞおとなしく坐つて、何にも云つちやいけないと、云つて聞かした外には、一語も云はなかつた人を、おまへは覺えちや居ないかな。おまへに取つては又と一人とないその人はな――その人はおまへの阿父さんだつたのだ。

ゲローリヤ　（びくともせずに）あなたがいろ〳〵な事をお並べになると、その中にはそんな事を覺えて居たやうな氣にならないものでもありますまいけれど、實際のところ、何にも覺えては居りませんの。

クランプトン　（憐れつぽく）おまへの阿母は、わしの事を何にもおまへに云つて聞かした事はなかつたかね。

ゲローリヤ　阿母さんは、あなたの名だつて、聞かしてくれた事はありません。（クランプトンは思はず呻く。ゲローリヤは稍輕蔑らしく彼を見て、話をつゞける）たつた一度ありました。而して阿母さんはわたしの忘れて居た事を思ひ出さして下さいました。

クランプトン　（頼母しさうに見上げて）そりや如何いふ事だつたね。

ゲローリヤ　（冷酷に）わたしを打たうとする爲めにあなたの買つて來た鞭の話を。

クランプトン　（切齒をして）うむ！わしに逆らつてそれを持出したのだな！わしからおまへを離すために！おまへがそんな事を